

祝詞手引草

完

特35

792

014550-000-5

特35-792

祝詞手引草

岡 吉胤/著

M25

ABB-0942



特35
792



周禮圖卷之四
禮記卷之四
禮記卷之四
禮記卷之四

周禮圖卷之四

周禮圖卷之四



祝詞手引草の首に記す

是の大八洲と天地の初發に天津神等の鑄造固め成し給ひ國にして萬國に先立て早く成初たる御國なり故其天地未分の形状より天津神等の靈蹤をも著るく傳へ來つるは天津祝詞の太祝詞の惟神ある御所爲よぞある天津祝詞の世になかりせばいかで天津國なる天津神等の大御手振の百千が一つも伺ひ察らぬべき事あらむやは先天地に先立て大座まゝ、天御中主神の神蹟は次に成坐し高皇產靈神皇產靈神の天津祝詞の太祝詞に宣傳へ給ひしこと著く又此三柱神を始め其他の天津神等の

御所爲は伊邪那岐伊邪那美二柱神の宣傳へ給ひ又其御子乃次々宣傳へ給ひて後には天語連語部かど稱へる職をも設て宣傳へ語り傳へさせ給ひて恐くも皇御孫命の天津日嗣と共に彌遠に彌永に傳へり來つるは最も尊く最もおむかひき神代の寶物にぞありける然るに神代も遠く世の降ち行まゝに其故實の誤り失はれむ事を慨歎まゝして天武天皇は古事記を記さしめ給ひ元正天皇は日本紀を編成しめ給ひしも彼天津祝詞によりて録しめ給ひしこと決く斯在バ天津祝詞を上津代に尤けく止事おれ故實を言擧して宣傳へ給ひしも乃あるに後に唯神

に奏す詞を乃み祝詞とも唱ふる事とありつるも尙神代乃ほゝに傳へこゝもこれかれ多かりゝを醍醐天皇の詔を以て輯録させ給ひゝぞ延喜式乃祝詞卷にはありける然るに今世外國の異ゝき教の渡來て何事も變り來つるを神に白す祝詞のみ尙神代の古き詞によりて文に美はゝく稱へ白して神等の神慮を感動し奉ほべきなまは神に仕奉る神官たるものゝ祝詞にこれほゝくてはいかゞ其職に堪べきおとならえや然るに官國幣社に仕奉る神官等は彼延喜式の祝詞よりて書連ねられむも其他の神官はいとふつゝかに疎かあるもありて祝詞も心

よ任せざる者の多かるより或神官乃乞によりて此手引草を物することゝおかれり故上卷には祝詞に必要ある詞を撰み舉て聊註釋し下卷には作例を多く舉たるも唯初學の人々に知易らゝめむと急に物ゝつるなれば考へ誤りもあるべく又紙數に限りあればさのみ廣くも求めず況てむつかゝき辭を省き強て安らかに物ゝつゝは誰ゝの人も入立易からゝめむとありされば此手引草を楷梯としていかなる高き臺にも登り立む人の世に多くあらはほゝうあむ

明治廿五年五月

權大教正岡吉胤誌

祝詞手引草目録

○天地之部

此にハ天津國と此國ハ係る祝詞の辭を集めて三項に分てり

天 象 一ノオ

天津國に係る詞又日月星虛空雷鳴或は風雨旱魃等の言を擧たり

地 儀 三ノオ

國号國體日本の國土より外國ハ係る詞又山川草木水火に係る詞を載たり

歳 時 五ノオ

上古神代年月日時晝夜古今に係る言を撰み擧たり

○神祇之部

此にハ天神地祇八百萬神等の神威神徳或は靈魂妖怪等ハ係る詞神事祭典等に係る詞を集めて三項に分てり

神 靈 十三ノオ

天神地祇を祭れる御號また神徳祖靈の尊號追号などを擧たり

妖 魅 十六ノウ

惡鬼邪神或は物怪病魔等禍事をなして人心を盪惑する類を擧たり

神 事 十八ノオ

祭祀鎮祭其他神の御上に係る事神ハ白す禱言或は神驗恩賴或は、神に仕奉る式法清祓報賽神理幽等契必の語數多くあるべし

○人事之部

此には人世の事業身の勤惰心の喜憂等には係る辭を括ひて三項に分てり

人 倫 廿四ノオ

至尊皇族の御上に係る詞或は男女老幼五倫從僕等に係る稱号君臣百官位階貴賤の職掌名義等を載たり

支 躰

廿七ノオ

或貴賤乃人體よつきて四肢の活動進退
或は勞逸病死等に係る詞を集めたり

性 行

廿八ノウ

心性の活用身の行狀に係る慷慨悲歎恩愛奮發
或は靈魂れ功德忠姦邪正よかゝる詞を擧たり

○神物之部

此一切は神の御前に必要なる神殿器財調
度一切は神の御前に必要なる三項に分てり

宮 室

卅二ノウ

神を鎮祭すべき神座を始め本殿假宮等に
係る言或は門垣柱等に係る詞を擧たり

器 財

卅四ノウ

几案床几毬平盆等或は玉鏡劍弓矢
幣帛神籬神典等に係る辭を擧たり

供 物

卅八ノオ

御酒御饌新稻及河海山野の御
贊其他玩物馳出物等を擧たり

○言語之部

拾言語ての活用に係る辭を
拾ひ語て四項に分てり

朝 儀

卅一ノオ

朝廷の御儀式よ係る祝詞或は宜
命に出る必用れ辭を擧たり

助 辭

卅二ノオ

發語結末或は詞の延縮等に
用へき助辭を拾ひて載たり

雜 事

卅三ノウ

祝詞に必要ある
用語を擧たり

數量

四十五ノオ

物數を算ふるあるに品によりて稱への異なるあるを聊舉たり

祝詞作例

祝詞を書べき心措へ祝詞を奏すべき心得また此作例を擧たるもたゞ初學の人の爲にする事を述べ奉祭に係る祝詞は奉祭要儀に譲りたる由をこゝにわかれり

○一月一日祭

四十七ノウ

○元始祭

四十八ノオ

○孝明天皇遙拜祭

四十八ノウ

○祈年祭

四十九ノウ

○同上

五十ノオ

○紀元節

五十ノウ

○神武天皇遙拜祭

五十一ノオ

○大祓奉告祭

五十一ノウ

○天長節

五十二ノオ

○新嘗祭

五十二ノウ

○例祭

五十三ノオ

○祈晴祭

五十四ノオ

○祈雨祭

五十四ノウ

○除蝗祭

五十五ノオ

○避雷祭

五十五ノウ

○地震祭

五十六ノオ

○疫神祭

五十六ノウ

○乞命祭

五十七ノオ

○除邪氣

五十七ノウ

○塞神祭

五十九ノオ

○避方障

五十九ノオ

○竈神祭

六十ノオ

○井神祭

六十一ノウ

○山神祭

六十一ノオ

○宮門祭

六十一ノウ

○地鎮祭

六十二ノオ

○新始祭

六十二ノオ

○柱立祭

六十二ノウ

○神社上棟

六十三ノオ

○人家上棟

六十三ノウ

○假殿遷宮

六十四ノオ

○本殿遷宮

六十四ノウ

○正遷宮祭

六十五ノオ

○新宅祭

六十五ノウ

○養蠶

六十六ノウ

○酒神祭

六十七ノオ

○祈旅

六十七ノウ

○漁獵祭

六十八ノオ

○出船

六十八ノオ

○初宮參

六十八ノウ

○祈平産

六十九ノオ

○祈家内安全

六十九ノオ

○架橋祭

六十九ノウ

○開道式

七十ノウ

○講演奏上

七十一ノウ

○學神祭

七十二ノオ

○武神祭

七十二ノウ

○大國主神祭

七十三ノオ

○惠美須神祭

七十四ノオ

○猿田彦神祭

七十四ノウ

○天満宮祭

七十五ノオ

○鎮魂祭

七十六ノオ

○祖靈祭

七十七ノオ

○修祓詞

七十七ノウ

○拜風神詞

同

○拜竈神詞

七十八ノオ

○拜井神詞

同

○降神詞

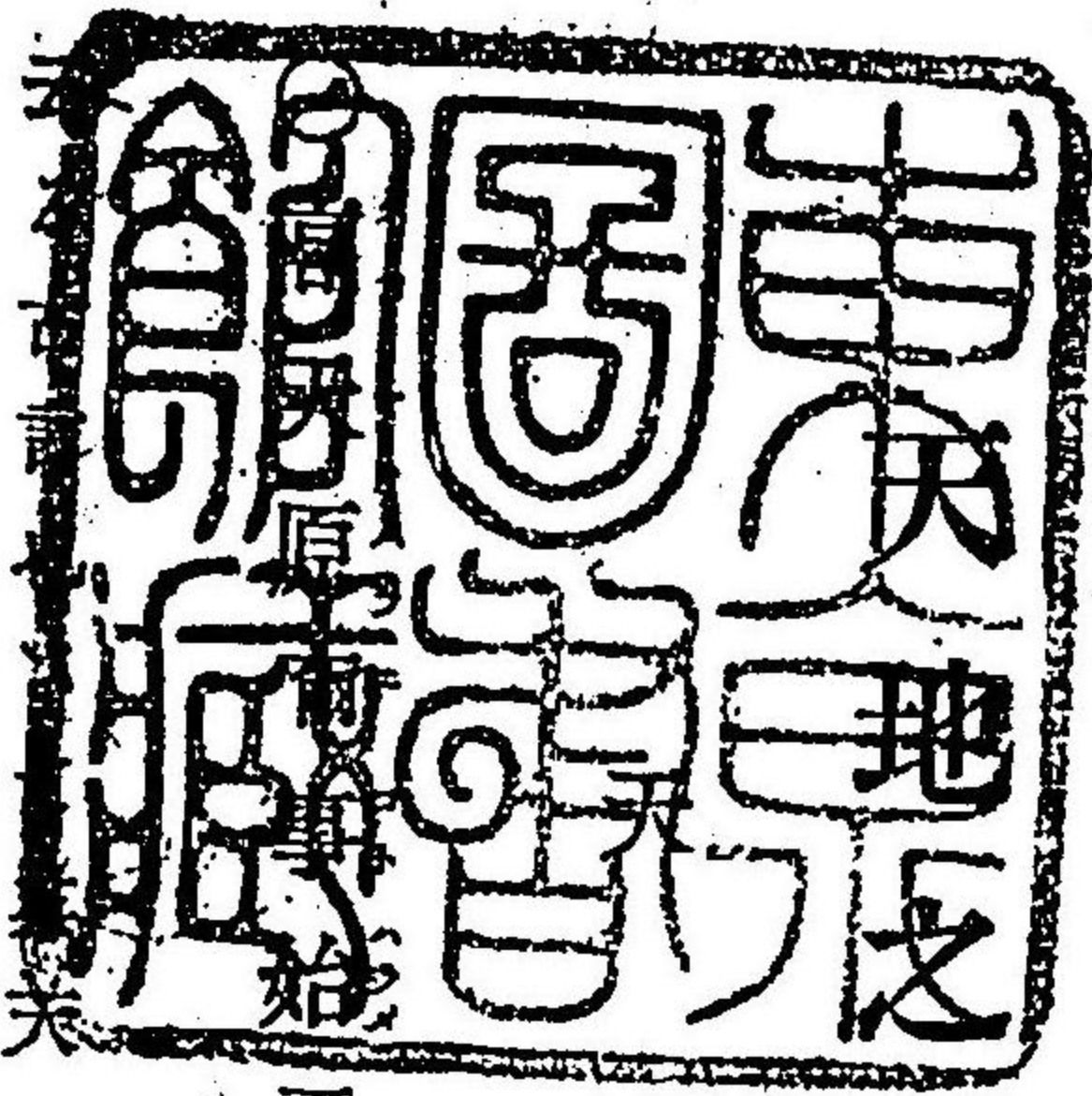
七十八ノウ

○昇神詞

同

祝詞手引草

岡 吉胤撰



象部

天^{アマ}之^ノ高^{タカ}く見^ミゆれば高^{タカ}アマと云^{イハ}べきをアを省^{はぶ}くは音^ネ便^{べん}なり原^{ハラ}は廣^{ヒロ}く平^{ヒラ}らうなるを云^{イハ}こは天^{アマ}つ國^{クニ}と云^{イハ}ふ事^{コト}を始^{はじめ}め給^{たま}へるを云^{イハ}ふなり

○天^{アマ}在^ア哉^ヤ 天上^{アマノ}に神^{カミ}等^{ナラ}の坐^イすを云^{イハ}ふ 又^{マタ}天^{アマ}にて在^アし事^{コト}をも云^{イハ}ふ

○天^{アマ}地^チ乃^ノ初^{はつ}發^{はつ}能^の時^{とき} 由^ユ 世界^{セカイ}の始^{はじめ}まりよりと云^{イハ}義^ぎなりユはよりの切^きりなり

地^チ乎^ヤ鑄^ツ造^ツ給^{たま}比^ヒ 紀^キふ月^{ツキ}の神^{カミ}人^{ヒト}に著^ありて我^{われ}祖^そ高^{たか}皇^み産^う靈^{たま}神^{かみ}豫^よかじめ天地^{あめつち}を鑄^ツ造^ツ給^{たま}へる御^み功^{こう}ありと論^{ろん}したまひしによれり

○天壤乃共無窮爾

天照大神の皇孫の命を此國に天降し給ひし時の神勅によれりムタは向立の義にて共にといふに

同しトコシへは天津日嗣の窮まりふきをいふ

○天地日月乃共爾

天皇の治看す御代又御壽を長く久しきよしに祝奉

つれる語なり

○天登長久地登久

とて天地と共になと云ふ

手離禮

皇孫の天降り坐さむとて天上の御坐所を放れ給へるを云へり

○天乃磐戸手押披支

磐は殿重

なる由の替辭ふり天神等天降坐むとて天つ國の御戸を開き給へるなり

○天乃八重雲手伊豆乃千別

爾千別天

天神等の遠き雲路分て天降り坐るをいふ

○天乃八衢

神等の昇降坐べき岐の數多あるを云り

○天乃壁立極

天我遠く望めば壁の側立るが如く見ゆるを云

○白雲乃墜坐向伏限

遠

所は雲の墜伏たるさ

○青雲乃靄極

雲の立ちひける限りを然云へり

○天地乃退

方乃極美

天地のあらむ限りを云る古語あり又天地の底比之内なとも云へり

○天乃岩窟

天つ國にて天照大

神の閉居坐し

○日若宮

日の御國の別宮なるべし

○天乃安河

天上なる大神の大宮所の前

に流れし河と道えたり此河原に神等の多く集ひ給ひしと見えたり

○朝日乃豊逆登

豊と贊辭あり逆登と榮ね登るお

て朝日の出るさまをいひて其日の吉時とほめていふ辭なり朝陽乃豊榮昇りとも書けり

○夕日乃降

日の傾きて暮ゆく

時を云り

○天地爾照徹

日神の六合之内に照し給ふ利を云伊照徹須とも云へり

乃御霧

御の眞とも佐とも通ひて朝夕の霧を云へり

○科戸乃風

息をシと云ふてシナは息長の義なりろは伊弉

諾神の佐霧を吹拂ひ給ひし御息又成坐る神を科津彦神と云へるより風をも然か云へり

○天陰氏氷雨降留

和日

の悪きをしけるとも云なれば日まけるの義なるべしヒサメは大雨淫雨を也然か訓りもと氷の降るを云へるより雨の甚たしく零るをも云り

○雨雲久九覆比霖雨降續此間より雲が空を覆ひて雨の晴れざるなり ○天雲乃多

度伎毛知受便に同じ ○淫雨忽晴あつとよききたる雨の俄に晴るを云ふ ○雨雲

乎科戸乃風乃氣吹掃雨雲を風の吹とらひて也 ○俄爾颶風吹出天 ○忽

然暴風起暴風も颶風も海中のお ○日麻泥久雨不零幾日も雨のふらさ

るな ○雨風時節爾協比十風五雨時の空きに順へるをいふ ○熱支日影乃日竝

氏照波烈しき炎暑の打 ○早魃打續天日てりのつ ○甘雨衰令

零給閉甘雨の好雨なり ○惡風洪水爾不相賜暴風洪水の難无久なとも云り

○雷神鳴波多米伎イカツチは怒津持の義にてハタメキは鳴わたるをいふ ○雨雲乎保呂爾

踏阿多志黒雲をゆるくに踏ちらして鳴 ○霹靂志豆雷の落ちたるをいふ

地 儀

○豐葦原天つ國より此國を稱へる言なり豐ハ寛に大あるをほむる辭葦原は國の始めに葦の生たる有さまをもて然いへるなり

○瑞穂之國瑞とみづくしき穂を云るにて穀物の美はしき國とほめてしかいへり ○葦原中國これ天

上より稱へるなりこは葦原 ○大八島國淡路嶋大倭豊秋津嶋伊豫之中なる國と云ふ意なり 二名島筑紫嶋壹岐島津嶋隠

坂之三子島佐波嶋の八洲を云りこれは妹妹二柱ノ神の ○大倭豊秋

津島こと一國の名なるを大和は古く天皇の都 ○浦安國浦と心に

へもなく方に心のや ○眞秀國記にやまどはくにの麻本呂波とあり

義あり秀真國また秀國
かどあるも同じ

○玉牆内國

大已貴命の名づけ玉へるとありて
これも畿内なる大和を美て然云り

○日高見之國

日を高く見て打晴たるさまの祝
言なるべし是も大和の國に云り

○楯並留大和國

四方に山ありて楯を並
べたるが如き國なり

○日本

日神の成出坐し本つ國と云義にて然書
來れりされどこをもヤマトと訓べきな

り万葉には日の本
の倭國ともあり

○神州

これの御國の神等の篤く御心を凝し
て修理固成給へるによりて然云り

○皇

天皇乃統御し給へ
る義にて然云り

○食國

これも天皇の知し食す國と云義なり總
て身に受いる、事をナスと云りさて此

をケクニとよみ食邑
の食とするは非なり

○國土

洲嶺ともありて大地を云り分ていへば國
は界限の義にて名つけたり東にて垣をク

子と云も此意なりとあり土は聯土の
義泥土の連きて凝成れる意の言なり

○國土稚在之時

紀に國稚地
稚之時とあ

るによりて成文に然書れたるにて天
地のはじめのさまをいへる言あり

○言靈乃幸波國

上代より言正
しくして自ら

さきはふしる
しあるを云り

○國中

萬葉にはクヌチと訓り區域闊境なども
然訓り常にはクニノウチと訓べし

○四方

乃國中

中央と云るにて神武紀に畝傍山の西南極
原地者蓋し國之塊區乎とある是なり

○中州風塵无之

畿内の賊徒悉く平
定したるといふ

○國中乃御柱

二柱神の假馭盧島に天降り坐て國
土を生成給とむとて天ノ瓊矛を其

嶋に衝立玉ひてこれと國之御柱と見
立坐しが後には小山となりしなり

○海

大海は海中なと云りワタハ
渡ると云ことなり古書に山

に越と云海には渡ると云りワタツミハ海つ持の義にて海神
の御名なるを後世には海のことにいへるは渡つ海の義なり

○滄溟

青海原とも書りアヲハ初々しき時をさして云る言ありウミもウヒウブ
に通ひてあらゆる物れ初めなれば然云しふらむまた見遙かしたる狀の

蒼々と廣く見ゆるに
よりて云るならむ

○四海

天下を海かけて廣く云ふ辭
なり海内とあるもみな同じ

○率土乃

濱 大地のあらむ局りを云こと之普天
之下とあるに對へたる言なり

○宇内

宇宙間をいへるふり八表、
八紘また六合之内など世

界を弘く云るに ○海表

海外に同じく 外國を云り

○常世國

底依國の約れる云て絶遠き外國を云

りまた字の義めて神 仙の住處をもいへり

○是神風乃伊勢國波常世之浪重浪

歸留國

奈利重浪のしく浪乃寄るをいふ遠洋より浪の利寄來るさまを賞て大神の託宣給ひし御辞あり

○輶音乃不

聞國

是も上文の次によりて矢叫びの聲を聞えぬを賞給ひしなりされば今も皇大神宮の近きまゝりにて大廠を放ち煙火を揚るな

とは憚るべきことなり

○傍國乃可憐國奈利

此地は南に片寄りて結構なる國と宣給ひしあり

○是國

爾居麻欲須

此國に長く鎮りた。以上四句は天照大神の倭いと詔給ひしなり。姫命に託宣まま、神勅也

○外國

ニの略にて海外、外蕃、諸蕃、などを訓りまた西戎、夷狄、蠻夷、外夷などもいへり醜夷、醜虜などは殊る卑しめる云なり

○潮泡乃

擬豆成留國

二柱神の生成玉へる大八島の外の國とも之大きも小きも國土と海水と漸々に分る、に隨ひてこ、か、し、こと潮沫の

れのつから擬堅まりて成れるとの古傳なり

○島能八十島

嶋は國をも云り八十は數の多きをいへり

○國々

島々所々

村々里々あともいへり

○漢國

唐國、赤縣、西土、支那、震且をも然訓りまた皇國を日出處と云へるに對へては

日放る國とも云りカラと云るは崇神天皇の御代に大加羅國人始めて來朝しより云馴たるにて廣く外國をも云り

○天竺

竺土、身毒國など云りまた日の没る國とも云り

○島乃崎々磯乃崎不落

萬葉に嶋の崎前磯乃崎前また嶋之八

十嶋墜事無くなどあるも同じ様の言なり

○遼久邈

支氣地 遐境、遠陬などいへるも同じ

○黃泉國

根國 底國

また根之片洲國などありて大地の中心にありて疎び荒ぶる邪物などの多かる穢き國なり

○與美津枚坂

黃泉に入べき

處みある類と幽との塚なり

○八十畑手

八十と多くの隈々と經行て甚遠き處と云義にて幽冥中を然云り

○谷蟻

能狹度極

谷間の蝦蟇は何國にもあるものなれば、かいへるなるべし高橋氏文ふは谷蟾除乃小渡留極權鏡乃通布極とあるも同じ

○鹽沫能留限

海潮の満ゆく時流る、沫の到り留るといふ意にて天の下の遠き限りをいへり ○國能退立

限 國は地と云に同し退立は遠放り立の義なり

○馬瓜能至留限

馬の行かざり陸地をいふ ○舟艦

乃至留限

船の行通ふべき海路の限りを云り ○狹國者廣久

せばき小き國も廣く祝白

せる辭

○峻國者平久

さがしくけはしき國も廣く大きなるべし

○生國足國

生は活動の義足と

充滿の義よて國土を美稱ふ辭あり

○四方手見露山川能清地

遠く見わたされて山川のけしきよる

○大海乃清支渚

浪寄留清支濱邊また海畔乃淨支汀なども云り

○可怜小汀

甚宜しき

水際の地を云り

○味御路

ミチハ字の義にて千どのみいふべきに御てお言を添たるなりされはいと喜道と云ふ義なり

○海陸

ウミガは海處ありクマガは國處なり今クガと云るはクマガの畧なりカは在所住所また山里をヤマカと云へるにて知べし

○河原

つねには河水のほとりの地平のみいへど水中をさしてもいへる例多し海原野原の類なり

○高山之末

短山之末

末は山の上を云り麓を山本といふに對へることばなり

○佐久那太理落多岐都

佐は眞よて眞下垂なり川水の沸りて流れ落るを云ふなり

○荒鹽之鹽之八百道

海中に潮路の多くあるをい

○天香山

天つ國にて天岩窟の前に眞坂樹眞鐵などを此山より神等のとらせ給へる故事あり大和國の香山は其かたはしの落

たるなりとの古傳なり

○神奈備

大御和鴨飛鳥などに云てもとは神の森といへることなりしが後には地名なりしなり

○青垣山内

垣の如く山の回り立るをいふよりいづこにても山をば青垣とはいへり

○走出之宜山

之出立之妙山

山の形狀を美て稱へるなり

○山中嶮絶

山の嶮絶なるを云こゝしきとも云り

荒山中

山の奥深きさまを甚しくいへるあり

○奥山

奥深き山を云あれどたゞの山をも云り又ミヤマと云は路を御路とい

ふに同じし深山 ○戸山 外山とも書てッ
の義にあらず ト山の意なり ○大峽小峽 カヒは山の片ろ
る處をいふ萬葉に山 ○朝日之直刺國夕日之日照國 東方に向ひ
て朝日の影

を直に正まむか向ひに受たる所よて西の方も打晴
て夕日の影も障りなく刺地や美稱へたる也 ○羽山志藝山 端山、繁山
の意なり

○茂左備立留青山 茂り立神さび
て妻まき山なり ○宜ヨシ奈な神かみ左ひだり毘ひ在あ留あ田た 備はり
てかう

山なり ○朝日乃日向處夕日乃日隱處 日隱は日影の刺たるが
さ、すありて陰になる

を云中昔の歌に加か宜い呂ろ布ふとよみ今世に加か宜い流りゅうと
云是なりこは西に山の聳たるさまを美稱はたる也 ○旭照利夕暈輝久
可美地 朝も夕も日のよく ○要害乃地 何處いづにても是を守るに便利
あたる結構かの所 宜いしき處をママといへり

○湯津磐村 湯津は清潔の義なり又雄々しきかたにも云へるなり祝
詞に———之如久塞坐さとあるは清潔きんじやく殿だん重おもき石いしの群ぐんた

てるが如く立ふさ
がり給へるを云り ○大宮地 神の鎮坐す境内を云また皇居
をも云り都も宮處みや乃義なりあり ○石切

平ひら之の岩角を切て平ひら
坦たんにするあり ○地曳坦 志し土つちの高たか低ひあるとも ○敷平留地乃

平ひら加か爾に地形の平坦を
云る祝言あり ○本土 桑梓そうし本處ほん本居ほん本郷ほんなどいあ
りて吾われふるさとをいへり ○道口道

後のち都みやこより入い初はじる處を口くちと云與よの方かたを尻しりといふ其その前後の字を用いて筑
前ちくぜんをツクシノミチノクチと云ひ筑後ちくごをツクシノミチノシリと云ふ類

りあ ○食國乃遠乃御朝廷 其國の政事を行はんが爲に朝廷
より置せ給へる府縣の類なり ○東京

アツマは日本武尊の弟橘媛を偲しのび給ひて吾われ嬬は者は耶やと詔給ひ
しより起れりミヤコは宮處の義にて天皇の大座す處を云り ○府 東京
大坂を三府といへりト

ホノミカドと訓べし ○縣 阿ガタと班山あより出たる語にてもと朝廷
の御料を云り今府縣縣廳などをミコトモ

チ、トホノミカド、ミツカサ、ミアガタ、マツリゴトノヤ、マンドコロなども訓
べけれど方今の府縣縣廳によく合へりともればはねずされば當く音に唱

地儀

一七

へてある ○郡 孝徳天皇の御世より縣と云しほどの地をば郡と名づけ

べきなり ○郡 孝徳天皇の御世より縣と云しほどの地をば郡と名づけ

らば郡をもアガ ○荒熊乃棲止云奈留蝦夷 人と害する荒熊のす

タと訓べきなり ○新墾 新たに開きたる田島を云ふ ○御

營田 物を作る田なり佃を然訓り記に ○新墾 新たに開きたる田島を云ふ

戸代 神田をも訓り御年代の意なり年は稻をいふ神の御稻をつくる料

○天狹田長田 天上にて大御神の啓らせ玉へる良田なりま ○千町

乃小田 廣き田地 ○硯地 土地硯確また荒蕪不毛地など ○粟田豆

田 粟豆を生しむる島 ○民地 受持て領れる局りの田地を ○坊内

紀に里長坊長などありされば坊 ○皇神乃敷坐里 敷は知と同じ神

内ハ今町内市中おと云に同じ ○齋場 忌庭も同じ忌清め

り云 ○大神乃宇須波伎坐留里乃五百里 氏子の村 ○嚴乃磐境

潔々しく掃ひ清めたる境内をしか云り ○沙庭 神と降り請せ奉て其御命を請ふ場にて忌

○齋場 忌庭も同じ忌清め ○靈時 神武紀より一を立とあれば壇場

しべ ○往左來左乃路乃間 前途、歸程など ○海幸山幸 幸とい凡て

吉き事あるをいふ海にて諸魚を得山にて諸獸 ○海原乃邊 爾奧爾毛

を得るは身の爲によきことなればしかいへり ○朝和爾伊加伎渡利

神留領坐須 海邊あるは奥なる嶋などに ○波乃間

かきは權にて ○夕潮乃満乃登等美 爾 トマミハ港へ

水をかくなり ○五百重乃浪乎伊行渡 比

遠き海を舟の行なり
○天忍石之長井之水
天眞名井之水、天忍水とあり、このもと天忍雲

根命の天神、こひ受て持下り給ひし水
○某川上乃下津磐根
地底に深

く在る岩
○地震轟支動美
ナキ之根動

り
○下動美寄來牟地震乃災无久
地鎮祭なとに云り
○山川悉動國土

皆震
須佐之男命の天に昇り坐る時の
○國爾家母火乃灾不令有

賜
大には國の中小に之家の内
○川入火燒
川入は川に入て溺れしむるをいむ火燒は火も

て燒を
○忌火
清火を云火靈産神の御靈なれば慎しむべきなり火穢るれば神の怒りにふれて諸の妖災起ると云り

○黄泉戸喫
記に伊邪那美命黄泉國に往坐て戸喫し給へることあり戸とは竈のことにて黄泉國の竈に積がれたる火を以て

炊きたる物を食ひ玉ひしによりて伊邪那岐命に相見たまふこと協はざりしとなり
○香具土乃災
火災をいふ

庭燎手焚豆
神事儀式などの時庭に燒火を○ふことはもと天岩窟の前に火處燒とあるより今もしかするわざととなれるなり

○底津石根爾燒凝之
石根造土か凝固まるほ
○秉炬
手火の義なり万葉に手

火の光とありまた松明は手火松の義ならむ燒松の義なりともいへり
○山陵
天皇の御墓ありサ、キは狭々築きの意なり

○奥津城
墓をも訓りこは野にも山にも奥のところに築くものなれとなり
○墳墓
墓は凡て廣く云るにて貴も賤も

築きたるを築かぬも皆墓あり墳墓は土を築きたるにて冢や同じきか冢は築き墓の義也
○塋壙
死體を埋る孔なり
○標

内
神等の領らせ玉へ
○水陸之利
海陸の便利宜しきを云り
○幽境
幽界も同じす

た仙境など云り何れ
○國體見爾遣時爾
こは下つ國のありさまを上つ國より見に降し給へ

るに云り事のありさまをカタといひアリカ
タともカタチともいへるはふるき辞なり
○足日木乃山乃常陰爾

生立留木 トカゲはた
を陰なり ○遠山近山爾生立留大木小木
山々に生 立る大小

の木 ○賢木 坂樹また榊を書り榎や松などの
常磐なるをも榮木と云けんかし ○葉廣熊白檜

葉の榮ぬ廣でれる所をいふ熊 ○嚴樞加本 樞の茂りた
は葉の茂く隠りたるを云り ○榎 榎も訓

り葉の廣きを榎といひ葉の少く杉に似たるを柏と云べし本、一樹の名に
あらず紀に葉をも然訓り上代に之飯を炊くに既にも敷もし覆ひもして炊

きつらむ依て炊葉の ○上枝下枝 古書おは多くホツエ、シツエと訓り
意なるべしと云り カミツエ、シタツエと訓もあしから

す ○小竹葉 古くと神樂よ小竹葉を葉振し音のサ
、と聞ゆるより負へる名なりとぞ ○奥山乃眞阪

木乎伊取持來 豆 山の榊を取 ○草乃片葉 垣葉とあるにて訓をま
來れるなり ○草乃片葉 垣葉とあるにて訓をま

しるべし ○羅 女蘿、松蘿など然訓りマツゴケまたサルチカセなど云り
とあり 古此日影を懸とせしことあり後世にも青白の糸を組て

左右に垂るを日 ○千年乃松乎佐根古士乃根古士 豆 千歳も生榮
影かづらと云り 千歳も生榮 ゆべき松を

根引した ○千代乃影有留忌竹取添 豆 上の松に添て祝したる
るなり にて一月一日の飾など

に云ふべし猶是等の祝辭の多か
るべけれと處狭ければあけず

歳時

○太古 上古、太素、元始などありて世の初
を云イニシへは往し方の義なり ○昔 曠昔、曩昔など然訓り

り ○草昧之時 世の始め萬つの事未だ成
整はざる時をいふなり ○神代乃有形手 代上

之狀乎とあ ○世運乃隆替 隆替の興廢、顯晦など云に
るも同じ 同しく代の盛衰をいふ ○茂御世

殿之、五十楹など書き盛に殿
重なる御代と祝白せるあり
○手長御世
田永、手永など書き此も足り
長き御代と祝白せるなり安

御代足御代、可美御
代などいへり
○千秋長五百秋
千五百秋、千秋、長秋、千年、八千年
千代、萬代など皆御代を祝奉る

言なり
○萬世爾大座坐
米斯給比
天皇の御壽を神等に祝白せる辭なり
○大御代乃榮

叙へ
安く治まりし御
代の盛りをいふ
○當時
昔も今にも其時と指て云る辭なり
○往年
往古、往昔、など云

り
○當時風俗
其時の世のありさまを云り
○古爾復左世給比
古き御代の美はしき御手振

おかへらせ給へるをいふ
○未代澆薄
此も末の世となりて何事も衰へゆくといへり
○玆乃年立

回留朝
一月一日の朝をいへり
○新志支年乃始米
上に同し
○毎年爾
年ごとに古言なり

依り毎年乃例爾
依り毎年乃例爾
○年緒長久
年緒は年といふことなり
○年麻泥久
年幾

もといふ義なり頻年、連年
○氣那賀久
氣は來經にて年月日比經行をいへり月日長くといふ意あり

○御歲豐爾
年は田寄の義にて穀物を云穀物のよく稔るを豐年と云り
○月我中爾月乎擇比

日我中爾日乎撰比
月我中爾日乎撰比日我中
○八十日日波在
毛止

日は多くあれども其中よ今日そ吉日
○何時波有止
毛上
○生日乃

足日
物の生榮る日事の足充
○吉日乃吉時止撰定米豆
某日を吉辰と撰み

定むるなり祝
○味爽
會明、曙、早曉など然訓り
○日爾異爾
朝爾食爾ともありて毎日を云り

異も食も借字なりけと來經の切りたるにてカとも通ひし云るなり
二日三日などのカなりさてこれをカとのみも云ひヒとのみも云ふまた

カとヒと重ねても云り二日をフツカノヒ三日をミカノヒといふ類あり
こと二來經の日と云義あれば正しくとしか云べきなり
れをまた下上

になして日にけにと云るなれば日
々にと云に同意なるをしるべし
○賀迦那倍豆 日々並べてなり日
數を並べ敷ふるを

○夜七夜晝七日 伊邪那美命の石隠れ坐し時此御言あり七日と
經れば穢れも清まるべき幽契の元より有つる

なるべし其
他例多ま
○來日 翌日のアの省かりたるなり明字をもアクルとは訓
までクルとよめるは古言の格なり又紀に明日明且

明年などあ
るも同じ
○間無久閑無久 間斷なき
を云り
○非時 臨時、不時をも訓り
常ならぬをいへり

○倏忽之間 白地また造次頓沛あをを訓
りつかのまなどいふに同じ
○頃者 間者、日者、遁者、頃日
なをみな然訓り

○常夜往 行を云常夜如須思比感波比などいへり
トコヨと常に暗きをいふユクハ年月の經
○差頃 俄而、少
時、暫而

○暫之間母 萬〇又思麻良久とあるをわも
へバシハヲクは後の言なり
○今之紀間毛 今之紀間毛
自今往

前などあり今より後々に至るまで
といふ義なり今毛今毛も云り
○伊都之可 何時かなり萬葉に何
時をイツと訓りシは

助辭
○阿佐米余玖 朝目吉にて朝とく起出て物をみれば悦はしきも
のなりまた寤といふ言も朝目といふことによあ

むら
○胎月 女乃産月を云
臨月も同じ
○年乎踰月乎彌利豆 年月を經
行を云
○物

換星移里豆 年月の過行ま、お世の中の
萬の事も移り變るをいふ
○降知行世乃有趣 何事
も衰

へ行末の世の
狀をいへり
○累世 奕葉といふも同じく
世をかさぬるあり
○中葉以降 中世以來
とも書り

○夜中曉刀休息布事无入 日夜の勉
強をいふ
○烏羽玉乃夜吉止人乃

熟寢爲留亥乃時 ぬば玉は冠辭なり人のよく寝い
りたる夜中をよしとするなり
○未經袂辰爾

記には未經
幾時とあり
○御代乃號乎明治登稱豆 御代の號とは
年號を云り
○年乃序

波何年月乃次波何月 年月の順序を云べし

○天地乃共長久 天と地とのあらむ限り

○日月乃共爾遠久 日月と共み相替らぬを云り

○夜守日守爾守幸賜閉 夜となく

晝と夜と常に御守りある様にとなり

神祇之部

神靈

○天神 天津國に坐す 神等を云り

○天祖 天皇の遠津御祖と坐す天皇を云なれと今は天照大神を云なれたるたり

○別天神 別天に坐す天神等を云り別天の事は徴古新論に辨へたり

○造化三神 天御中主神、高皇産靈神、

神皇産靈神を云り此三柱神天地の最初に成出まして天地、日月、星を始め人類萬物をも悉く成初め給ひて造物造化の根元を掌どり坐るあり

○皇親神漏岐神漏彌 皇親と天皇の親み坐る御言なり神漏岐、神漏彌は大御祖の男君女君に云る義にて崇め親

み給ふ皇祖 天神を云り ○高天能神王 カブロは神漏岐、神漏彌の岐彌を省きたるなり ○皇祖皇宗

天皇の御大祖を云り分ていへば天御中主神を皇祖、天照大神を皇宗と稱ふべし又皇孫命神武天皇をも云り ○皇天二祖

天神とも云りこ、には高皇産靈神天照大神を云り ○大祖 神倭伊波禮毘古命を云り即神武天皇なり ○日神 天照日之

大御神ともありて大神の天津國なる日界に鎮り坐て六合に ○月神 月照徹らせ給へるを此地球より御謔て日神とは申し、なり

命あり月界お鎮り坐て夜を照し給へる神に坐り ○神風乃伊勢乃國拆鈴乃五十鈴乃川

上爾鎮座須天照皇大神 神風拆鈴共お冠辭なり今の度會郡宇治ノ里を五十鈴原と云しなり今も五十鈴川と

云るあり大神は垂仁天皇の御代に倭姫命の祭鎮し給ひし也 ○外宮乃度會乃山田乃原爾鎮座須

豐受皇大神 外宮は元皇大神宮の別宮なりしに雄略天皇の御代御夢の御告ありて丹波國より遷奉りしなり此神ハ五穀の元

靈と座して衣食住を守り給へるなり ○御年皇神等 大年、御年、若年の三神を始め五穀に御功あし神等と云り

伊勢二宮乃相殿爾座須皇神等 本宮には天手力男命、萬幡豐秋津姫命なり外宮には皇孫邇々藝命天兒

屋命、天太玉命なり ○同別宮 本宮には荒祭宮、伊弉諾宮、伊弉册宮、月讀宮、月讀荒御魂宮、瀧原宮、瀧原並宮、伊雜宮、風日祈宮なり外宮

みと高宮、土宮、月讀宮、風宮なり ○熱田大神 尾張國熱田神社は正殿二字相並へり東殿には草薙劍西殿には中央日本武尊也

西は天照大神、素盞鳴尊を一座とし ○五元神 風神、志那都比古神、志那東ハ宮簀姫命、建稻種命を一座とす 都比賣神、火神、迦具土神

金神、金山毘古神、金山比賣神、土神、波邇夜須毘古神、波邇夜須毘賣神、水神、彌都波能賣神、この五元神は風火金水土と共に成出坐て其御靈あるが即ち

其五元を掌り ○海神 大綿津見神なり海をワタと云は渡るの義ツは給ひし神なり 助乎ミは持の義にて海津持といふ義なり

○山神 大山祇神なり山を持坐神なり ○木神 久々能智神なり木祖とも云り祝詞に屋船久々運命是木靈也とあるを

思へば豐受姫神 ○野神 鹿屋野比賣神なり ○水戸神 速秋津日子神、速秋津比賣神、速秋津比賣神

なりミナトは水門の義にて海に出入る門口なり ○水分神 記に天之水分神、國之水分神とあり六和國なり吉野、宇陀、都祁、葛木

等に坐す水分 ○井神 水波能良神、御井神、天忍雲根神を祭れり御井神

神社是なり 忍雲根神は天孫降臨の後再び天上に參上りて天津水を申し受て返り降

り坐し神あり此神天に登り坐し時の勢ふよりて鳴雷神とも稱奉れり

○坐摩神 居處傾の義にて皇居の ○産土神 本居をも訓りウブス

誰にまれ其生れたる ○氏神 其氏の神を云なれど ナハ令生根の義にて

土地の鎮守神を云り ○竈神 火産靈神、奥津日子神、奥津日

命、屋船句々能智命なり八雲御抄 ○門神 榊磐廬神、豐

にやりつかみは受持神とあり ○厨神 榊安彦神

元靈なり彦姫二神は諸民に 炊焚の事を教へ給ひしあり ○木工神 手置帆負命、彦

○舟神 舟は浮寶と申し素盞鳴命の造初め給ひしあり鹽土老翁と

り ○塞神 八衢比古神、八衢比目神、岐神なり此三神は泉國の邪鬼を

にも祭鎮す ○幽冥大神 大國主神あり幽冥とは神等の坐す所をいふ

べき神なり ○賢所大神 崇神天皇の御代に摸造し給へる八咫鏡

人の生死、禍福等 を司り給へり ○鎮魂八神 神御魂、高御魂、玉留魂、生魂、足魂、大宮賣、

朝の皇靈をも鎮 祭し給へるあり 神、御膳神、事代主神なり謹て考るにこ

はもと神魂に所縁ある前の五神を鎮祭し給ひしを後三神を祭り添ら

れたるあやあらんろは後に神直日神を祭り添られたるにて知べしされ

ば前の五神を左座として中央に玉留魂とあるは天御中主神なり其左側

に高御魂ありて其次は神御魂あり右側に生魂足魂とあるは諸冊二柱神

なりそは生國魂、足國魂とあるにても知べしさて右座には御 ○宮比神

膳神を中央として左側に大宮賣神右側に事代主神なりとす ○福

天鈿女命なり此神大宮の内に侍り常に善言美詞を以て仕奉り給

ひしによりて大宮賣神とも稱へ白して愛敬を守り給ふ神なり

津日神

大屋比古神又瀬織津姫神とも云り此神は伊邪那岐神の黄泉の穢を濼ぎ給はんとて中瀬に下りかつぎ給ひし時に成出坐て御

必健く一速き神にして禍事を甚しく忌嫌坐るなりさるよりて動もすれば御荒ひ坐ることあり御名に禍津とあるにりて邪惡の神とな思ひ誤り

○直日神

大戸日別神あり此神も葦原乃身派の時に出現坐し神にて諸の禍を直し荒ふる心を宥めて惡を善に直す神

○疫神

須佐之男命なり疫病を攘却給へる由の御名也行疫神となり思ひまがへる俗に盜賊方徒罪方など云てろれを掌さる事

のありしに

○醫神

大己貴命、少名彥神、二神病を癒す法を始め給へり

○祓處神

天津神國津神あり

また瀬織津比女神、速開都比女神、吹戸主神、速佐須良比女神をも云り

○多賀大神

伊邪那岐命あり淡路の多賀に鎮座ままけ

るを近江にも勤請したるあり

○熊野大神

紀伊國なる上宮三社は中伊邪那美、神左早玉男、神右事解男、神なり下宮は天照大

須佐之男命なりとす

○龍田神

大和國龍田の立野に鎮座す級津比古神、級津比賣神なり天御柱國御柱命とも稱へ奉れり

○出雲大神

出雲國杵紫宮に鎮座す大穴持神也此神大地宮となりて幽政を統治し給へり

○大三輪神

神名式に大和國城上郡大神大物主神社とあり此神は大國主神の和魂を祭れり山邊郡なる大和神社と荒魂を祭りて大國魂神とたゞへ奉れり

○幸魂奇魂

大國主命れ和魂を云り幸魂は其身を守りて幸あらしむるなり奇魂は萬事を覺知て事業を成しむる故の名なり

○御魂

御魂も同じ但天御中主神を古書に天靈神とあるはアマツミタマと訓へし天魂命とあるハアマツムスビと訓へし又大神の

御靈先考の御靈などあると本略を云り稻靈稻魂などは其功德をたへたるにて恩頼また靈の意なり

○國神

天つ國に坐神を天

神と申すに對へて此國なる神を云り

○某命

御名の下に命てふことを添て申すは尊稱あり紀に至尊日尊と書別られたれと古よ

り書來りの借字なれば妨げなかるべし

○汝命

汝ハイマシともミマシとも訓て尊むかたにいへり

○大神

記

天照大神伊佐那岐大神とあるふよりて至て尊き神等は大神と書てもオホミカミと訓べし

○皇神

スメは統知給ふの義なり何

れの神をも尊みて然いへり ○歴朝皇靈 先代なる天皇諸の御靈を云り ○代々乃祖等 先代の祖

靈を廣く云り ○親族乃御靈 諸親族の御靈なり ○知々乃實乃考命柞葉乃妣

命 知々乃實柞葉冠辭あり命は尊みていへり老妣は死したる父母をいふ

妖 魅

○禍神 枉神とも書り世にも人にも禍事をあし行ふ惡神を云りマガと元曲るより出て一切の惡事の名となれり ○邪鬼

妖魅、惡鬼なども然訓り ○災 禍、殃、妖氣、妖孽、災難なども然訓りワザと諺、童語などを物の態と、のワザと同じを今世にも神は死靈、狐狸おどの崇る云る是なり ○神氣 神の崇りあるをいふ物氣は生人にまれ死人にまれ崇りをあすを云り ○蠱物 怪物

おどの人の心身に混交するといふ歴魅また蠱毒などを然訓り ○天災地妖 天變地異も同じ ○荒振神

惡き態する邪神をいへり ○惡神喧響 邪神等が一時に起りて騒ぐを云り ○疎夫留物 親し

反對にて此方にあしき ○枉神乃言牟禍言爾相率相口會事無久 令相口會不給とも言り邪鬼の爲に同類に引入らるるまひするを云り ○疎備荒留物乃下 疎備荒留物乃下

行者下手守里上往者上手守里 邪鬼の來るを神の防ぎ護り給ふに云り ○待防互

不令入立 同上 ○喪无久事无久 無害無事とも書りモはマガの約なり禍事なく無事安穩なる

をいふ ○夜波如火瓮光神在 火瓮は火を燒く器なりひらくしてゐる邪神をいふモコロは最比の義にて如しの

古言也 ○晝波如五月蠅水沸 水は皆の義也ワキに虫などの出來るをウジワクなや云るわくなりとは邪鬼どもの五月比の蠅の

如くよりたかれるを云り ○螢那須光久神狹蠅那須喧宜留神

螢那須光久神狹蠅那須喧宜留神

上に同じき ○石根木立青水沫毛事問 豆 石や木の切株水の沫
意の辭なり ○語問志磐根樹立草乃片葉毛語止 豆 物いひあらび
て物を言し ○疫病蔓里 病の流行するをいふエヤミと疫惱の義
むるなり ○固陋 一遍に執滞るを云り

をやめて静謐なるをいふ ○病令怠給問 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
なりたるをいふ ○都々牟事无久 萬葉につまはすともあり恙无久
○枉神乃禍事在 受世禍事の起らぬ ○速封此病乎癒給問 速く病
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○所患 ヤマヒの止の義とも云り活動 ○病志事无久煩 支 波志事无久
惱牟事奈久苦牟 ○都々牟事无久 萬葉につつまはすともあり恙无久
事奈久とも云り ○速封此病乎癒給問 速く病

○枉神乃禍事在 受世禍事の起らぬ ○速封此病乎癒給問 速く病
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助
給へど神に 頼むなり ○病令怠給問 上 同 ○篤痴惱牟里人等手救給問 助

神事

同じ枉神の所爲にてちと ○一速支疫病起 豆 利人多爾失奴 疫 烈 疾 起
やふる荒ぶる神など云り ○人草多爾天折支 人民の多く病で 早死するをいふ ○大神僭比

死ぬるをいふ ○人草多爾天折支 人民の多く病で 早死するをいふ ○大神僭比

邪神等が正しき神 ○蟹加行横乃道 正しき神の道の外な る異しき道々を云り ○頑愚

の眞似するなり ○蟹加行横乃道 正しき神の道の外な る異しき道々を云り ○頑愚

頑狂、狂悪など同じ邪人を罵る言なりクナはカタクナのク ナにて頑の意なりダブルと狂れ意にて心感へる人といふ ○喧擾 音

の喧しきを云ふ悪 ○固陋 一遍に執滞るを云り ○喧擾 音

人の騒くにも云り ○固陋 一遍に執滞るを云り ○喧擾 音

○掛卷毛畏支 口にかけて申すも恐れ多きと云義にて神の御名を白す 時に云起す詞なり又掛卷毛綾爾恐支言卷毛文爾尊支か
○掛毛恐支 同上文字を略せるなり又懸毛
○祭鎮 神社にも 船中にも

あれ其處に神を祭り鎮るをいふ鎮祭も同じ又萬
葉に鎮齋とも書れはイハヒマツルともいふべし ○ 拜祀留 神を崇め
て仕奉る

あり拜禮齋 ○ 鎮坐 其處に留り住給ふをいふ静坐と
奉も同じ ○ 神留坐 神は

神等の御上を云ふ添て申す ○ 神集集給比 へはハセの約りな
稱辭なり留坐は鎮坐の義也 ○ 神集集給比 れば集はせるなり

宇須波伎坐 ウスはウシとも云て主の義ありハキは張にて神等れ其
處を主張坐て我物と傾居坐るをいふ傾坐とも牛掃坐と

も書 ○ 敷坐 是も神等の統知て ○ 招奉安置奉 神の御靈を招請
り 傾きませるをいふ 奉りて其處に合

坐奉るをいふマ ○ 請奉擲奉 同上 ○ 大前 神の御前をいふ
そは合坐なり ○ 請奉擲奉 同上 ○ 大前 廣前とも云り ○ 宇

頭乃御前 ウツは足と、なとれるを美ていへ ○ 相宇豆乃奉 比乃奉
り俗にいふうづ高きのうづなり ○ 相宇豆乃奉 比乃奉 比乃奉 比乃奉

上ノヒはナヒにて商トのナヒ也其神等 ○ 相諾比給比 是も其事を
の其事を長珍として納受し給ふをいふ ○ 相諾比給比 宜しと聞食

受給へるなり ○ 阿奈々比奉 補奉とも輔佐奉とも書り足荷の義にて足の揚
るなり 持が如く臣の君を輔持にいへり神に仕奉るに

も云ふ ○ 所聞食 聞看とも書り聞も看も知も食も皆他物を身に受入
べし する意同き故に相通はして云り又メスをナスと云も

物を食より出 ○ 見之給比聞之給比 看之明良米給比 ○ 聞食 倍
たる語なり ○ 見之給比聞之給比 看之明良米給比 ○ 聞食 倍

サへはセを ○ 恐奉 もとは字の如く恐る、意なるをろれ即諾ふ意に
延て云り ○ 恐奉 もなりて天皇の命畏みなど云て俗に奉畏といふ

是なり ○ 恐自物 かしこくもと ○ 畏美畏美白久 スを延てサクとは
り ○ 恐自物 かしこくもと ○ 畏美畏美白久 スを延てサクとは

に白久といひ云終 ○ 告奉久 ルを延てラクと ○ 禱白 禱字ホキと
るに白寸と云り ○ 告奉久 ルを延てラクと ○ 禱白 禱字ホキと

訓るにホグは祝奇方にノムは乞所方に ○ 茂梓中取持氏 神と君との
云子グと二方を兼たる辭なりと云り ○ 茂梓中取持氏 中又神と人

民との中 ○ 申給止久申 自らいふ言に然申すも敬ひの辭なり ○ 奏祈
にも云り ○ 申給止久申 俗に自の事を御座候といふが如し ○ 奏祈

志験久 祈りたる印 ○神験 靈験、神異も ○靈異 奇靈、靈妙、なほ同し
なるを ○靈幸 神乃御靈の幸福給ふをい ○恩頼 フユは震ふの義
云り ○御靈賜 神靈を給は 御心毛明 爾加 神等の
振ひて殊更に幸ひ給 ○多親爾聞食世 たしかにきこ ○眞佐夜加爾
かにもすなり ○大御稜威 神威、神徳を云り恩徳、
見明 米 悟り得たるなり ○大御心毛宇良宜坐 互 神の御心も愉
天津奇護言 奇は靈妙の義なりイハヒは齋にて凶事にふれぬ ○天
津御量 天津神等の御思慮をい ○伊豆乃御魂乎幸開給開 清淨
御靈を以て幸 ○大御心毛宇良宜坐 互 神の御心も愉
福給へとなり ○惟神 快思食てあり

神隨とも書り神等の御事蹟を尋ねて今も隨ひ行ふべき道あるをいふ御上
を云には多く此言を添て云へり天皇の御上にも云り天皇は現御神と申て
神にて坐すすま、に物 ○御所爲 神等の爲し給ふ御業を云 ○各々
し給ふとしなればなり ○愛久所思 志惠賜比 憐賜比
掌分坐 神等の各々某々に功業を 持分て司り給へるを云ふ ○神罰 神の御
御愛憐を垂て惠給へどあり ○護惠比 延たる言也 ○伊須呂許
敦久廣久慈美賜あども云り ○神乃須佐備 神の荒びます御所爲を云
もいへり ○荒備給比 健備給比
比阿禮毘坐事无久 給ふことなくとなり ○道
崇給布事無久 善神も悪神にも云り善神も御心にかかりぬ
速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

崇給布事無久 善神も悪神にも云り善神も御心にかかりぬ ○道

比阿禮毘坐事无久 給ふことなくとなり ○荒備給比 健備給比

御愛憐を垂て惠給へどあり ○護惠比 延たる言也 ○伊須呂許

敦久廣久慈美賜あども云り ○神乃須佐備 神の荒びます御所爲を云

もいへり ○荒備給比 健備給比

比阿禮毘坐事无久 給ふことなくとなり ○道

崇給布事無久 善神も悪神にも云り善神も御心にかかりぬ ○道

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

速振 嚴捷又千早振とも書りては神の御靈のいちじる ○御心一速

比給波之止爲豆

一速は稜威疾の義なりヒはフリの約りたるにて其有様をいふ

○稱辭竟奉 稱

水の満たるをタ、へといふに同く其神の御功德を十分に崇め養るなり竟は言を致しきはめて言舉するをいふ

○辭別豆白久

別に言分るをいふ

○仕奉 後使にて上たる人に使之れ奉るなり何事に

○拜

奉 拆屈むの義なりチガム

○額突 額を下に突つくるをいふ額を古言ホマカと云り

○鵜

自物頭根衝抜

鵜の水を潜ぐには頸を倒に水に衝入る、状を人の頭を地お下て敬ふに云り自物は鵜の如くといふ意なり

○鹿自物膝折伏

鹿の膝を折て伏たる如く座するをいふ是古へ畏み敬ふ時れ状を平田翁はカグと訓れたれを萬葉に

十六自物と書ればシ、ジモノと訓べし又壯鹿成ともいへり

○鵜成伊這廻利

鵜のかいつひたる状に這拜

みて並ひ居るをいふ

○庭雀宇須受麻理韋豆

群統居而とも書り雀は庭に降り居て打群居る

ものなれば然云かけたり

○參集

マキは昇所より尊所に行時に白言なりウコは何候のウカなりナハレルは所楯並のなこれ

るにて並在の義也

○集侍

侍に參の意あれば是も同訓なるべし

○參入罷出人

神社にも禁中にも出入

する人をいへり

○持忌

麻波持清 麻波 イムを延てイマハリと云キヨムを延てキヨマハリと云忌ハ凶事を避て吉

事と守る義あれば祝と同意あり

○平常

利殊爾齋比清回 平生より格別ハ潔齋するなり

以伊都久

モチは持可々吞の持にてもてはやすもてゑすなどのモチに同じイツクは忌仕の意なり

○由志理伊

都志理

ユは忌慎て汚穢を避る義イツと汚穢を禳て明く清まる意なりシリは禮自利のジリにて物質を云り

○禮代

禮自利とも云禮はゆるやまひにてシロはシルシの約りなり

○慎美敬

敬はキヤビともウヤマヒとも云り

○謹

眞 畏みをかゝてま

○天逆手

離退手の意にて退手また後手あせ書りては事代主神の世を避給ふ時に始

りて今も祭典の終
りにさるとざあり ○八開手
八は彌にて手を左右に彌廣之ひらきて
柏の義なり俗にカシハデといふは柏手

を柏手と誤
りたるなり ○短手
音の高からぬやうに柏手をいふ忍手とも書るを
もて訓をしるべし今世葬式の時に用ることあり

○手掌
手をした、かに打あげて歡ぶさ ○加牟菩
候と云り手物亮々爾とも書り

岐本岐玖琉本斯
神壽々令狂の義なりクルホシは左に右も事
を悉してさまくにと壽さわぐといふ ○

登余本伎本伎母登本斯
豊壽々令廻の義なりモトホシは
此處にも彼處にも爲廻らすを ○神

祝爾祝支
言を重て其事を打返し ○天津祝詞乃太祝詞事
も太

も稱辭なり祝詞はノリトキゴトの略みて元は上
より下にもいふあれと今は神も奏上の言を云り ○諄辭
同上宣刀、告

も書 ○誄
忍辭とも書り漢籍に哀死
而述其行之辭也と註せり ○神賀詞
神壽辭、神吉事とも
書り神賀吉詞はカ

ムホギノヨゴトと訓て出雲國造
より天皇に奏奉る祝詞を云り ○報賽
報謝、賽謝とも訓り神の靈顯な
を辱み謝ひ奉るをいへり

○身祓
身滌の義なり祓祓潔身をも然訓りこは伊弉諾命の御所爲より
穢れを清むるわざとはなれるなり世俗にコリとて神事の時水

浴る事のあるは河降の
義にて其意は同じ ○須賀須賀斯
清淨、清潔をも訓り此言
の意は濯々しきなり ○

奉出
献出、奉遣なと然訓り貴
き所に遣さる、を云り ○作具仕奉
備備ともいへりソナへは
不足事なく齊ふるを云ふ

○令捧資
朝廷より何某にも
たせ給へるを云 ○常毛進留
平生も例として
捧奉るをいふ ○皇

神乃御尾前仕奉利
神幸の時前後に
供奉するを云 ○人垣立
取圍みて供奉す
るさま垣の如之

なるを
いふ ○大神乃氏子乎始
天下四方國乃公民爾至
迄ちとつとく語るり ○過犯瀆事

乃有波
何ほと言行を慎みても按の外なる過失も
あるべきなり故に我より決めて然云り ○神直日大直日

爾見直之聞直志給比直日神は禍事を直し給へる神徳あるに 廣

支厚支神慮爾宥給比恕之給比過犯けん罪穢を寛大なる神の御心に海容し給へとなり 漏

落事无久漏落も過失と同しくおぼえずあやまつを云り 引綱乃千目乃八千目乃洩

流事无久脱留事无久網の目を洩る、にいひかけて云り 堅磐爾常磐爾かた岩の如く

とこ岩の如くとし 伊加志夜久波叡乃如久生活し彌木榮の義なり又五十根彌加

枝比義とも殿入桑 彌向榮ムクハ向起の義にて俗にむつくと起てなといふムクなり又茂久の意とも

云 彌榮爾令榮彌足比令足給閉神葉乃彌佐加延爾望月乃彌多良比爾なともいへり

蕃息里榮久由倍 人民の繁昌するを云 又畜類などにも云り 已乖々不令在人々の心の疎み隔りる

事なきを云り 嬉美辱美思比給閉長謝乎申斯 自己の上み給ふといふ言を添て敬ひ言になるは例

多 武運長久久之 武道彌遠長になとも云べし 神逐ヤラヒはヤリを延

拂ひ却り給ふを云 神樂神エラキてふ言の約れるなり又神アソビといふもあーからず 神託

神の人に著て告覺し給ふと 神語神の詔を御言を云り又たよ神の御上の事を云る古實をもいへり

神理幽中の神 理をいふ 神習神の御所爲み效ひまつるあり 神事幽冥の神政を云る今と神に

仕奉る事 幽世乃御掟幽中の神等の御定めを云る 幽契神の御所爲の深き所由あるを云り

神乃道道妙留奈由緒手 奇靈奈留神道手 上代乃道手廣久厚

久釋明之上古神聖の道を十分と説明すなり 神等乃御徳乃辱支本乃由緒乎

世人爾普久知神之有難き所以を 米世人に廣く知らしめ ○神事乃幽契手知留限

波里令知給問幽顯の分界してより神れ御上の事は正やかに知る事出來 されども神助によりて知らる、丈と知る事を得せしめ給

なり ○雄雄志久 倬志 神乃御稜威御神徳の健く 隆なるを云り

人事之部

人倫

○現御神明津神も同し天皇は世に現くす御神にして天下を統御すよしなり現人神とも云り ○皇美麻命

皇孫皇孫選々伎命より同し日嗣しろしめす大御次に坐ば今の天皇を ○天も然申去奉れり皇孫命とも書べし祝詞にはかく申奉るる正しき

皇命此語多くは宣命にわれど今は祝詞にも書り又天皇とも大君とも稱奉れり ○天孫天神の御孫といふを省きたる言あり

孫ハ萬葉に眞奈子ともありて眞子の皇祖神れ御自ら宣給ひ 義なり故に天子ともいふ皇孫も同じ ○皇我皇言なり天皇も御自ら

の事を然神武天皇の御功徳を美稱へて然白せ 宣給へり ○始馭天下之天皇るなり又崇神天皇を肇御國天皇と云

るも ○聖帝天日の照しますに伴しく天皇の天下を知しめすの意も 同し ○聖帝て日知とは稱へ奉れるなり帝は御門の義にて皇居を云

るは邊つらひ尊ぶ言なり
後には天皇をも然稱へり
○高光留日御子
高光は天照と云むが如し日神の御裔と申すこ

り
○八隅知之我大君
萬國を統御し給ふ義なり安見の意にあらす
○皇子
親王をも王を

も然
○皇太子
御日嗣に定り坐るをいふ又春宮をも東宮をも然訓り
○阿禮坐車皇子等

御出生坐む皇
○王等
王をオホキミとも訓れと公ならず
○奈賀命
ナハ名あるを美て稱ふ言ふ

子皇女を云り
兄名根名妹も云り又名
○吾那勢命
神等の夫神を尊みて然申し給へり今吾妹君とも夫君とも云り

○我那邇妹命
神等乃妻命を親まみて申し給へり今は妹命また吾妹子女と云り
○親族
親屬眷屬とも書り

ウカラは生族ヤカ
○父母
カゾイロとも訓り
○祖父祖母
大父大母の義なり父母の兄弟は

小父小母の義にて
○日子
凡て男にヒコ女にヒメと云は美稱なりヒは奇靈の義なり
○眞名子

實の子と云るにて愛子をも訓り
○伊呂勢
同母兄弟をイロセイロドと云り母をイロハ妹をイロモも云り
○裔

孫
末孫後胤など同しハ
○同胞兄弟
同母のアニオト、といへり
○少女
處女嬢子

おをを訓て若
○嫗
老女老婆なをを訓り
○姥
老女の稱なり専女とも云り
○家刀自
シト

と跡知の義にて家政を司る細君をいへり
○大丈夫
益荒男の意にて傑人男兒かとも然訓り
○手弱女

手の弱き女
○耆宿
宿老も同じ老人を云り
○老翁
息長人の意なり
○童
髪を結ばすわ

らけて有故の名也とぞウナキは髪の頭に垂たるを云メザシは髪を目をさす計なるをいふ
○妻子僕從等
家内

の妻や子や召
○君臣
君に對へては臣をヤッコと云朝廷に仕奉る人を敬ひてオミと云は大身の義あり
○

君止臣乃御中彌陸爾備親備
君臣の間は親しきなり
○群臣百官
朝廷又仕奉る官人

をすべ
て云り ○諸卿等

前つ公の意にて天皇の御前より仕奉る公等云ふ也侍臣、卿大夫など然訓りマチギミ又マウチギミと

も訓る也 ○大宮人

公卿、鳳上人等を云り

○朝臣

吾兄臣の切りたるに親み崇めて云稱なりアソと

のみも云り又崇名ともなれり

○官々爾仕奉留人等

諸の官員を云り

○物部

上代より人は

武勇を尊むが故に人を替てモノ、フと云武事の勝れたるを武士部と云るを略きてモノ、ベと云モノ、フとも云るなり

○國造

國々にある御臣の義あり

○伴造

諸部の御臣あり

○伴男 能八十伴男

宮城の内に仕奉る官人

武官の人々の數多き群の長をいへり 韃負、劔佩などの伴男多かり

○大御巫

大は朝廷に仕奉るにいへり 巫は神の子の義にて處

女を充らるる由あり

○國宰

上代に守介、椽、目、とある守にあたりミコトモ子と天皇乃大命を受給はり負持て其國の政を司

る由の名なり今の府縣知事も然稱ぬべきか

○祭主

齋主も同じく神事の總裁たるもの云きと今は神宮祭主あるによりて祭

主とは書べからず

○神主

神に仕奉りて主たる人を云もとは祭主に同じ義あり

○祝部

ハフリはハヒを延たる

言なるべしそは神主の次に伊道かしてされるより然云るなるべし

○刀禰

ト子リの略なり殿守の義にてもと聖體を親しく守

り奉りしを舍人といひしを後に之上中下に互りて終に賤稱の如くなれり 海人、刀禰里、刀禰なども云り

○氏子

其神の統領め給へ

る標の内なる人を云て内子れ義なり又其氏れ祖神に對へては氏人といふ産須那神に對へては産子ともいへり

○正一位

位は

座居の義にてもと座席の階級より起りし名あり

○從二位

同上

○贈正三位

訓に唱るには權行

兼、なをいはぬ例ありれば訓に之唱へぬなり

○太政大臣

上一人を輔佐奉りて四海に儀刑たるべき有徳の人を撰ばせ

給へる官なり今の總理大臣を撰ばせ給ふ

○左右大臣

天下の大事を議りて大綱を擧るべた重任の官あり

○納

言 萬機を識りて其可を献し下言を奏進し上言を敷陳することを掌る

○參議

納言以上と共に万機を參り議りて國

家を維持する重任たり ○大少輔 副も弼も同し ○大少祐 尉、様、佑、佐、などもみなマツリゴトビトと訓べし

○大少録 屬、目、疏、書史、などを皆、サクワンと訓べし ○大少將 將軍も訓同し ○皇軍 皇御軍士

なり官軍 ○兵卒 軍士、軍卒、兵士、などを同じし兵をツハモノといふは ○精兵 銃卒も同じトキツハモノとも訓べし

○主従 主はアルジ又アルジノキミなど稱ふべし従は従者、従人、儻人、などを書てトモ

ビト又イヤッコと唱ふべきなり華士族又君臣を唱へしは ○教導職 總裁、管長、教正、講義、訓導、試補、などをあり

○里正 従前は名主庄屋などいへり今は村長と稱ふ ○青人艸 草の彌益

々に生茂るに譬へ祝て ○天之益人 人は死するより生るゝが多る世の人をひろくいへり

○百姓 人民、蒼生、億兆、などを然訓り大御田族の義なり ○田人 農夫

も同じ田子 ○丁 民の役使はるゝ者をいへり使丁、直丁、役丁、運丁、軍丁、などを多かり ○土俗 邦俗土人など

然訓 ○從婢 待婢、從女、などを然訓り古く女を子等といへれば前子等の意なるべし ○海人 海士、白水郎、漚を

然訓り又あまの ○拖師 機取とも書りまゝ水子舟人など云り ○漁者 漁人とも書り魚獵するもの

をい ○狩人 獵夫とも書り

支 躰

○聖體 玉躰御身をも然訓て天皇にのみ云る語あり 身は古言にムとも云れはマとを云しなり ○容儀 姿體、光儀など

も同じくヨソヒともカホ ○端正 形容れ美えきを云なた起居、進退の氣高き状ともいへり ○岐

疑之姿 同上なれども疑なる方に云り ○舉體不平 朕身不和をも然訓り惱しき事を云る古言なり ○

弱肩爾太禰取掛 弱き身に重きわざするを云て 身に負はぬといへる謙辭なり ○手蹟足蹟无

久 手足につけてあや 喜びの甚し ○柏手 手舞足踏手不覺 喜悅の甚し 柏手

其事を祝て歡ぶ態なり宴をウエゲと云 ○打膝 面白く樂む時の態なり直會に膝を打て歌

ひしこ ○赤丹乃保爾聞食豆 御食御酒を賜て顔色の榮わて赤く 美しきを云り 豊明の明り是なり

○活起豆 蘇生たる 草管見病臥在 遣つ、みは冠辭なり病之 止より出たる語なりコヤ

スは臥の古言なり反側をコ イマロブと訓るコイも同し ○遠延臥之 同上 ○勞支 病る事とも いへり

○悶熱惱卒 病に悩み苦しむを云 篤痴苦卒 同上 ○悶苦美 同上 ○

形體久都保利 追々に容貌の衰 弱するをぬふ ○伊登能伎豆痛支疵爾鹹盪手

灌加如久 いととさへいたむ疵よ盪 ○瘦萎豆 瘦弱、憂悴なとも然訓 りやせかどろへたる

○死 息去なり息は風にてシともいへり天子に崩とかきてカム アガリと訓は神魂の天に歸り昇らせ給へる義あり納言以

上に莞といひ五位以上に卒といふ其他は逝去、他界、殂、歿、な 〇頭邊爾

匍匐脚邊爾匍匐 頭脚に這まつはりて 歎き悲しむをいふ 〇憂閉吟比和備乍有乎

歎きまをいひて難 〇大君乃命畏美父母手齋瓮止置豆 父母も大事 なれど天皇

の勅と奉じて跡ふ 〇天皇乃醜乃御楯止出立豆 大君の御楯とな りて賊を防がむ

とて出 〇額爾箭波立登背爾箭波立自止 敵に背はみ 〇海行波

美豆久屍 ミヅタは水且漬るなり是は 〇山行波草牟瀨屍 屍の上

草の生るをいふ天皇の御爲に命をも捧けまつるべき古言なり ○大君乃邊爾古死米能杼爾不死

此身命は天皇に御爲に捧げ奉るべきなれば事なく安らかまは死じとなり ○足母阿賀迦爾 足掻足摩などする兒いへる

○棲邊 甚く畏み惑へる状また悲みまどへるにもいへり進退も然訓り ○進母不知退母不知 進退維谷と云に同一

○身毛棚不知 身の勞きを忘れりてなり ○厥終 最期の際を云り ○跌坐 足を組て坐するをいふ紀に寛坐をも然訓たれば畏ま敬ふ時の状にはあらざるべし

性行

○真心 心は元ホクヲと云て火凝の義なり真直に凝むくをマコ、ロと云り精神赤心など然訓り ○心乃表呂 緒心

と同じ之口之添たる言にてたり心の事なれを多くは心の内にむすぼる、事あるに云りしを延わてつゞけたり ○明支淨支誠

之心以互 清支明支正支直支あどさるまも短くも云り ○貞爾明支心乎以互君手助

奉利 貞實ある精神みて 天皇を補佐する也 ○恭遜之心 恭謙の情なども云り ○仰望之情

シマビは偲ども忍ども欽慕ども書て思ひ慕ふなり ○倭文能大御心毛多親爾 筋の鮮かよ分れ通りた

る如くに天皇の御心たしやかに坐せとなりタシニは儘になり ○御心手振起之 其事を思ひ起して一際應みいろしみ

給ふを ○愛盛爾 御意乃一爾治賜また天神乃一も云り ○愛悲 勞彌をも訓り續紀に伊等保白彌

奈母念瀕とあり今の俗言にいとしひと云も此言なり ○歎 長息にて心に思ひ結ぼる、事あるをり之長き息のつかる、を云さる

によりて喜しきことにもいへれを哀しきこと愛しきことは殊に心に結ぼる、ものおれば後にはもつばら其方に乃み云り ○恩親

之意 神にも君にも云り愛 憐之情なども書べし ○廣支厚支御徳爾撫賜比恤賜比 天皇

の高大なる御心に
愛憐坐けるなり

○勞美重美

人の勞を謝する言なり俗
に御苦勞と云にあたり

○愛養

鍾愛、養育をも訓りヒタ
シは日足しの義なり

○親腕相留

うらな之親
しきをいふ

○和備睦毘

中よ
く親

しむを
云り

○心乎一比力手戮

共に睦びて事を計らふ
あり同心協力も同じ

○心乎削志

手約互

自ら願みて儉かに身
の業を勵み勤るなり

○緩怠事無久

學問にも産業にも
怠らず勤るをいふ

務結

シマリは堅くすまな
く取持て弛緩ぬ意なり

○眞木柱太久心乎鎮固

太き柱を
鎮立たる

如く心を鎮め
固むるを云ふ

○靈乃御柱立堅

動なき心の柱を
衝堅むるあり

○神賦乃靈魂

神の授け給ひ
去御魂なり

○人神

人の身の中に坐す
神にて靈魂を云り

○宇武何志支

オムカシ
と云も同

し面向しの義なりムカシ
キと云はオを省けるなり

○伊蘇

勤しみなりイソハ功の切りたる
美之 言にて功志きこと、するなり

○歡喜踊躍

并躍、咲樂をも訓りうれしみ
よるあべるさまをいへり

○咲榮來互

人の喜ひ咲
ば顔の榮也

るさまな
ればなり

○心足

天比惠良々々爾饒布

皆満足して笑ひ
樂しむを云り

○見感

見
驚

見畏、おどある類の古言なりメデタ
シメツラシなとも此言より出たり

○男道无久

懦弱、微弱、謙劣などを
訓り拙く思ふる意に

て弱き意をも兼
たる謙辭なり

○身爾敢奴業

我身に應せぬ事なが
らと是も謙辭あり

○負

氣無 身に負はぬこと、畏みぬふ言なり
毛久 俗に勿躰なくもといふに似たり

○多豆可無支

拙劣と同
意の言也

らむまた便ふき
の義にもあらむ

○功績

功德、勳功などを訓りイ
サナシのシは助字なり

○操

守志をも
然訓り

心爾汚支隈乎置受

腹黒き事な
きをいふ

○奸偽里謡曲

奸佞邪
曲ある

心なき
をいふ

○宮進

神にも君にも仕奉事のたゆむこ
とあきを云宮勤爾勤とも云り

○事不

謹みて事を
行ふなり ○行定互 事を取擬ひ捉るをいふ 重くも軽くも廣く云り ○邪意穢心無久

しまよはがきたる
心なきをいへり ○大呂加爾思居留 其事に心を留すしてたゞ大 其事に思ひをるを云鹿略の

意なり ○怒赫然 互 イカリは氣上りの意氣上りの甚しき時は 面赤くなるをいふ怒激發憤なども然訓り ○嘖

護 其罪を責問を云り物語に母 ○伊豆之雄健踏健 足を踏ならし てたけるを云

○牙喫建怒豆 齒をくひしばり ○懷悒久慨支 憤懣悒慨 も然訓り ○狂

迷 朝廷を傾け奉むと謀るは現心には ○久那多布禮 狂逆と罵 る辭なり

○戰慄 慄然、振怖 ○和備 久は方なくさしせまりて憂 ○佐夫之

支 不樂不怜なども書りさび ○狡意 此さがしくなまがまてきをい ふ狡獪、狙獵など其意の字なり

○心佐久士里 小さがしく私智をふるふ ○訕嗔 互 紀又海人らが 騒き荒ぶるを

○無禮久 高貴の人を恐れずあしきとぞする ○逆奈行爾在 留

朝廷に背奉る 謀叛 登 タブレワザ、サカ 謀に同じ人をあしき

○惡態不止 互 轉支 惡きわざの愈進て 甚しくなるをいふ ○徘徊願戀 心に思ひ結 ぼふること

のありて憂へさ ○苦瀨 せは其處に當れる義にて 嬉勢、哀勢、達勢なども云り ○阿屋之 驚て 歎く

聲に一を添 忌々 之 忌憚らる、ことを云る言なるに恐みて憚らる

りて善惡にわたり ○酸彌 口にふる、味の酸きよりうつりて心にふる

ねて云り ○八尺乃歎 悲歎の甚し ○晝波歎比 加暮之夜 毛波息附

明之 日夜愁傷歎息

○村肝乃心痛美奴要子鳥裏歎居波

愁あることをひとく云

○慟歎 比加身退りし人を忍び

○欽慕奉利

追悼追墓を

○言奉為方為奉須倍不知

哀傷お堪すして何とも致し方なきを云り

○

為方毛為方無久

何とも為べきでたてなきをつよく云る言なり

○於與豆禮乃多波言

妖偽の狂とも書り人の死たるを聞て驚きて

○氏乃名不穢祖乃名

不落 家名を失はず先祖の名を辱しめざるなり

○千名乃五百名爾負持

高き美名を身に負持た

るを

○後輕久 ウシロハ俗に云跡なり思ひ

○已加比岐々々

心のよるか

○進退閑雅爾

舉動の賤しからぬをいふ

○志行高潔久

をい

○天稟聰明 生れあがら才

○此正道爾面向氏

正しき道に心を寄るを

い

○諸共爾議碁智氏

○不良

宜しの反なり今世にも其物の人に合應て

幸あるをフサといひ

○不祥

性をサガと訓り後比哥に愛せれ佐賀と云は元より自然にしか有ことを云言あ

りサカナキは其反にて然有べきさきに背き違へるを云り

神物之部

宮室

○宮 御屋の義にて神殿皇居に云り

○社 屋代の義にてもと假にたてたる御屋の意あり

○瑞乃御殿

瑞はみづくまきにて稚くすくまかあるを美稱ふ辭なり御殿は御在處の義にて宮殿を尊び云るなり正殿御舍御龜香など書り

○安

宮乃志豆宮

安く穩ひに鎮りませる宮を云り

○志都宮止靜坐牟正舍 同上

神宮

尊き神の宮を云れど打まかせてと伊勢大神宮を云り

○外宮

天照大神の外宮なり外はもとより内に對ゆる意なり

れども内宮は村上天皇の御時より云るにて其以前は大神宮とのみいへり

○伊豆能眞屋

思清まはれる屋と云義なり

眞は美稱なり

○天御蔭日御蔭

天を覆ひ日と覆ふが爲の屋なるよしにて是も美稱なり

○假宮

宮行

離宮、順宮など皆同し是は神にも天皇にもいへり

○神床

御床、小床、奥床など其時宜に従ひてミユカども訓べし

○是

乃神牀耐神籬立豆鎮奉留

是之家々の神棚などにも申す言なり

○正倉

神床をも然訓りほ

、まりて隠りかなる義なり小祠とホコラと云も此言より出たり

○天磐座

天つ國の神座を云り

○底津石

根爾大宮柱太敷立高天原爾千木高知豆

石根まで深く宮柱を突立て天原にも及ぶ

べく高く千木を擧て銅座と申して先其宮より美稱へ申す古言なり

○宮造利齋奉

御殿を作りて御祭り仕奉れるなり

○黒木用匠造禮留行宮

削り花げざる材木にて造れる假宮

○皇居

朝廷、禁庭、皇城など皆然

訓りミカドは御門の義なり尊みてまさしくさして云ざるなり

○屯倉

屯家、屯宅なども訓り名義は御家なり家宅をヤケともヤ

カとも云り國々の御田に成れる稻穀を納むる御倉ろの官舎をも令せて然云しなり

○陣營

陣屋、軍營、屯營、など同イタムロヤとも

○御門閉奉古は傍みおきたる戸を取て立ふさ ○取葺留草乃さしかり今も戸を立るといへり

噪岐無久屋根の破れてる、けぬやうにとなり ○戸扉乃錯動鳴事無久錯は行合あり

○御床都比能佐夜伎古の家は葛して結ひし故に鳴りろやめきやすければしかいへりツヒはつがひあり

○葛目乃緩比無久古は葛綱をもてゆひかためたれば然いへり ○夜女乃伊須々伎伊は伊須々伎と同しく

夜眠れる間に物に驚えれ吃驚して本心を失ひ立騒ぐをいふ ○伊豆都志伎事無久伊は伊須々伎と同しく

發語なりツ、はり、みなくつ、まはずなとのツ、よて常ならず心苦しきをいふ俗にづ、なひと云るもこれならむ ○家門高久殿門廣くとも云り家を門とも云るは今も然り

○屋内和爾夜加障事無久家内安全の義なり ○遠代爾傳利行牟石乃御門

爾傳利行牟石乃御門永く代も存るべき石の御門なり鳥居をも云り ○忌服屋神代に六御神の忌

清まりて神の御衣を織給ひし御殿なり今は神宮に機殿あり ○柱波高久太久板波廣久厚久柱も板も

嚴重なるをいふ ○前津殿戸後津殿戸宮殿の前の戸後の戸なり ○眞木乃板戸檜板にて作れる戸なり

○取置留椽椽乃齊置並へたる椽の整頓るを祝へるあり ○天乃血垂飛鳥乃災无久

血垂ハ千木垂の義あること大祓逆義に辨へたりされば垂木などを鳥の啄き壊すことおぞのなきやうにとなり

○御舍乃豊毛落豆雨露神床乎露之御屋根乃瓦も脱落て雨露の漏りて神座の濡れるをいふ

○御屋根朽損比御屋根の壊れ損じたるなり ○宮垣破壊宮も垣も破壊せるを云り

雉堞崩潰豆大小の垣も損したるなり ○母屋端を庇間といひ其次の間をモヤと云り ○喪屋屍を斂置て其事を行ふ處なり

○産屋古への子を産特別な家を建たるあり

器財

○百取机代之物

數多く置足はしたる種々の物なり代はシ
○八取

乃机爾置足

多くの味物と數々の几に置て献
るを云り八物爾云々とも云り

○百取乃几爾貯

數多の机に盛
備ふるを云り

○机毛繁爾打積置

同上
○机毛登乎々爾置高

成豆

几もたはひ斗りに高く置並べた
るを云り拆竹乃多和々爾とも云り

○如横山打積置

献物の
數多き

を稱へて然云り輕薄
の品又は云がたし

○高案
古くタカスキとあ
るは此類なるべし

○千位置戸
具被

を多く居たる所にて千
座の置物を云るなり

○千座乃置座爾置足

座といへり被物を
座といへり被物を

數多くみくなら
べたるに云り

○胡床
吳床とも書り
揚座比意なり

○假履

假床とも書り今
棧敷これなり

○濱床

机の廣きものなり古くヒラ
スキと云るは此類なるべし

○棺

棺も柩も概も然云り
又キとのみも云りヒツキ

はヒトキとも云て人の屍をいり、故なり分て云は
柩は屍を納たるを云柩は外柩ふてオホドコと云り

○凳子

ヒツギノダ
いと云り

○脛開高知

ミカと酒を醸むかめなり閉は借字にて上
をいふ高知は脛の上までしき及ぶ義なり

○腹脛満雙

酒を満た、へたる脛を多く並べたるさま
を云り腹は脛のおくらかなるを云なり

○平瓮爾彌盛

御饌な
を盛

備ふるなりヒラは深うらぬを云今
の大土器などの如くあるものなり

○玖珂瓮

採湯とて熱湯中に手を
入て神に盟事する時湯

をわかす
ものなり

○天能脛和爾齋許母利

脛和は美和とも省き云て脛、鍋
おとの惣名なるべしこは御食

御酒などを調へて其
事に齋こもるをいふ

○伊豆閉黒益之

閉は瓮にて魚菜焔をいへりこ
は清淨なる鍋にて煮焚するを

いへ
○葉盤

柏葉にて作りたるなるべし今は土
器をも云り枚手、平手なとも書り

○葉椀

ヒラデに對
ひたる名に

て深く凹まり ○蓋結 互に蓋を酌交して契りを結ぶを
たるあるべし いか杯をウキと云は古言あり ○玉鏡 玉

玉壺など然訓り水を汲料の器なり又水 ○獻留神財 進流神寶
を土椀に汲て奉るをミモヒとも云り とも書り ○御

船代 神の御靈代を納 ○御樋代 是も御靈を
め奉る物あり 納る物なり ○辛櫃 神饌を納る
櫃なり又

神寶を納るこ ○瑞八尺瓊能五百都御統乃玉 長き緒に數多の玉
とも有べし を貫列ねたるを云

緒に貫たるをす ○見明物止鏡翫物止玉 鏡之見明す物玉と
まるといへり 斷ふ物なればなり ○八

咫鏡 天照大神の御靈代あり名 ○眞澄鏡 清く明かな
義と八寸の鏡なるべし るをいふ ○麻蘇比乃

大御鏡乃面手意志波留加志天見行事能如久 天下を明かす看
すかはし知し食

むことになり ○兵 刀鋒の類の總名にて鑄物の義なり兵器兵仗
いへるなり など然訓り是より轉りて軍人兵卒をも云り ○御

弓御横刀 弓之執もの太刀は佩ものなれ ○射放物止弓矢 射放つ
ば延ていへり又崇めても云り 物とし

ては ○打斷物止太刀 太刀は斷もの ○天之波士弓 天之は母稱
なり なればなり にもいへり

ハジユミは弓を作りし木をもて負る名 ○天之波々矢 是は體を云る
にて楯弓なり梓弓槻弓檀弓など多かり 名にては

廣きをい ○生太刀生弓矢 生は活潑の ○劔太刀腰爾取佩支
へるあり 美稱なり

刀劔を腰に下るなり腰より ○燒太刀乃手穎押禰利 刀の柄を握
下に着るを皆ハタといへり 刀の柄を握

り紀に急握劔柄また接劔をツルギノタカミトリシバリと訓る ○御横
お似たる言なり又弄槍 弄弓 などあるをも思ひ合すべし

刀廣爾誅堅 米 大御代を打堅め治 ○燒鎌乃敏鎌 火に燒て作る物
め給へるをいふ ふれば鏡鎌とは

云り燒太刀も同しトガ ○衣笠 絹にて張たる蓋なり色は紫なり天皇
マは利き鎌のことなり の御蓋を紫なること式に見むたり

○天詔琴

天は天上の物に同じきを美て云るなりノリゴトは詔言所と云ふとにて神の來て詔言し給ふといふ意より出たるなり

○鼓吹

鼓を打笛を吹こと
を略したる文也

○雅樂奏奉利

音樂神遊仕へ
奉れるをいふ

○荷

緒結堅

馬に荷なご付る時は緒にて結付るを堅むるといふ

○荷前

御調を奉る最初の品物といふ初穂の義なるべし

○奴佐

幣また幣帛と訓り神に手向るものを云又祓物をもいへり禱布佐の義にて事を乞ねぐとて出すよしの名なまフサ之麻野り

○太御幣

太は稱辭なり何品にも神に獻る物比總名あり御手は御手向あり

○白和幣

白丹寸手と書て木綿

れこそあり木綿は穀木皮を以て織れる布なり又織らぬをもいへり殊に白き物ある故に白妙とも自由布ともいへり栲負のタクも同じ

青丹寸手

青和幣とも書り麻は木綿より比ぶればや、青き故に然いへり又栲と麻と合せて木綿とも云り共織たるをも糸のよ、あ

るをも用たりとみゆ

○伊都幣能緒結

イツは忌清たたる物をいふこは木綿を髪にもひ着るをいひていはゆる木

綿登るべし

○明妙照妙和妙荒妙

妙は栲の借字にて絹布の總名なり明照は色につきて云和荒は疎密につきて

○白賀着由布取

栲麻なごを細かに辟て下たるなり今は紙にて細かに切たるをも云り

禮代乃幣帛

御禮の印に變る備物をいへり

○天津菅曾

大ガは清なりリは麻にて佐芋の義なるべし

○安幣帛足幣帛

安は事故なきを云足は關落ることなきを云り何れも美て稱へる言なり

○絶

鹿ヤ

悪き絹と云意にて今のフトリと云ものと同じ

○絶垣

絶と長く引延て垣の如く立隔りるをいふ絹垣とも云

○千緋

高緋

ハタは羽袴にて絹にも麻にも織たるま、の品をいふべし今は大旗小幡を建ることにかれり

○帷幕

記にア

と訓り紀にキヌマタとも訓れど幕は字音なればトバリとも訓べきか今のまくと古への絹垣に似て古への帷幕は今の帷また幌などをいひしが

○壁代

絹布なごにて神座の四方に垂て壁の代りになれるをいふ上なるを承座と云り

○文布

筋織の義にて荒布

なりこは天羽槌雄神の織はじめ給ひしより其子孫常陸にありて朝廷にも貢奉りしなり後に大和國よりも出せしを倭文布といひそを略去て倭文と書てもシト
○五色物 五色の繩五色の糸を云り 又種々乃色物なといへり ○御調絲 五色

絲など捧げ奉るをいふ ○八十玉串 八十は數の多きをいふ玉串は手向申なり 五百枝賢木乃云々五百箇野蔦乃云々などあり

り太玉鏡 ○神籬 神籬を立て齋へるをいふこは神等の暫くこもりますべとも云り 熊はコモリカなりヒ

モロギは御室 ○志米繩 紀に尻久米繩端出繩などあるにて其義を知木の義なり ○紀に尻久米繩端出繩などあるにて其義を知

へり ○鹿草乎伊豆能席登苜敷豆 人氣に儲れぬ野山の草を用るなりアテは新素の義なり今も神事

に用る蔦をあらどもと云り ○太玉串 隱侍氏 隱侍と多くの王串の中に 齋

籬 神垣なり伊垣とも 書り忌むきの義也 ○神典 神代の御書を云りまた 皇典神書なども云り ○撰 撰備

書止書 志書籍乃卷々 故大人等の著述の書どもをいへり ○奥山乃大木以氏建

留多御鳥居 石にて造れるは略なり ○千代毛朽奴世石爾造留御燈 石の燈籠をいふなり

○紙以豆張留多大小御燈明 大小の提燈をいふ ○御馬爾鞍置留多繪乃扁

額 繪馬を懸奉るにいへり

供物

○由貴能御酒 ユキと忌清なり清まてりて造りたる神酒を云 ○黒酒白酒 上代藥灰を酒に和したるを

クロキ和せざるをシロキと云り今と多く清酒、白酒おとを用ゆることなれり ○豊御酒 酒を祝て稱へり万葉に丈夫之禱

あり ○許登那具志 事酒なり諸の愛事、哀事も和さむ酒といふ意なり ○惠具志 咲酒

おもしろくゑ
まる、酒なり
○歌比都舞都造利仕奉一夜酒
哥ひまひつ、醸せま
故事によりて云り

○天部酒
古くより然訓りアマ
サケとも訓べ之なむ
○酒樂
酒毒酒祝なとも書りホガヒ
はホギを延たる辭なり

○新嘗
新穀の饗なり大嘗をオホニヘ
といふはニヒアへの約りなり
○大饗
神にも君にも献る御
饗を云り大嘗と同言

なれども事は異なり
御饗ともいふべし
○天都御食乃長御食能遠御食
天神の依し
給ひし齋庭

之穂を天皇の聞食
を然稱へ奉れり
○朝御食夕御食能加牟加比
御食れは稲よ
り米飯にわたり

て云るより五穀をも總ての食物をもケと云るなり
カムカヒは饗向にて御饗を手向奉るを云るならむ
○御膳持留
穀物

とをしり給へ
○奥津御年
五穀の中に稲は最末に熟する故奥と云り
其稲れ中にも晩く成をオグチと云にて

知べ
○齋庭之穂
齋み清めたる穂といふ義にて大御神よ
り皇孫に授け給ひしを尊ひて然云り
○伊加

志穂
盛に足て勢ひある穂か
り俗に嚴らしとも云り
○八束穂
彌握にて長
き穂をいふ
○千穎八百

穎
カヒは稲の穂かり葉をすて穂
をきりて數多く奉るをいへり
○和稻荒稻
和は米なり荒は穎な
がらあるをいへり

○千稻八千稻
數の多き
を云り
○懸税千税
稲の穎を束結て竹な
どに掛けて備るをいふ
○米

母爾穎
精米又は
初にても
○糲米
抄久萬之禰と訓
り今いふ洗米あり
○茶餅
抄に祭ノ餅
とありて今

いふ白
餅なり
○毛知比乃鏡
餅は鏡にかたどりたるも
り然云りヒは飯の畧なり
○汁爾穎
毛穎酒

も飯にも作りて
供ふるを云り
○新磨乃米以炊多御饗
新穀の御
飯なり
○御調能

荷前
諸國より御調り
奉る初穂あり
○年穀豊稔伎
タナツモノは田成物の義なり
穀物豊饒五穀豊登なとも書り

○垂穎八握爾莫々然甚快實伎
稻の熟して美はしく
登れるさまを云り
○作食留

類をいふまた荒物は鳥類和物は獸類とも云り ○生御調能玩物 鳥にも獸にも生ななから進るを云り ○馳

出物止御馬 馳出物とし ては馬なり ○馬太伎行久 馬の手綱をたぐりゆくなり ○乗行駒

乃躡久事无久 乗て行馬がつまづき 作る、事なくとなり

言語之部

朝儀

○大命 止良麻 止 良麻は附てぬみ辞と聞えたり紀に臣をヤツコラマ御裔僕をミスエヤツコラマなど訓るをもて知べしこは大命なる

ぞとたしか又云聞する 意に添たる言あるべし ○大命爾坐 世 世は令する辭なれどもこ、は然らずこは略きたる常例の

古言となりたるならん大命に 宣坐せらるゝの義と聞えたり ○任 任マケは令罷の切まりたる言にて他國の官に遣とさるゝより京官にも

然る事となり 然る事となり ○天皇乃令任乃隨爾 朝廷の仰付のまゝになり ○大朝廷 大朝廷は元御門と云て皇居をさしたるより後に

は天皇をも然白すこと、なりたるなり ○天津高御座 天皇の玉座をいふ

○天津日繼 寶祚天位など然訓り日神の大御任を受傳坐て其大業を次々に知し看す由の御稱なり ○詔 詔豆ノ

の宣なりゴチは言爲也勅も同
し詔勅は天皇に限れるなり
○聖旨 倫旨、勅定な
ども同し ○宣 自
久自 自は過

をいふシにてはやく云々詔給
ひしよまなり奏之久ともあり
○奏比 シを延てサヒ
と云るなり ○奉 賛成遵
法の意

なり位記詔勅などを奉行する
人名の下にかけるも此義なり
○召上 御用召に預り
たるをいふ ○言依之
は言

事あり依之寄とも書くヨスなるを延ていふ言
なり事を其人に依任て執行はしむる意なり
○大義 人倫の道多か
る中み君臣乃

間は殊に重き
道あるといふ ○時乃御法令 當時の御
制令あり ○國乃御掟 朝廷の御
制度あり ○

○勅使 天皇の御
使なり ○參來 來朝、投化などを然訓りケリは
來而有と云意の古言なり ○侍 サは
眞の

意モラフはモルを延たる言ひてモルとは何
事にまれ心をつけて伺ひ考へ居るをいへり
○奏復 復命、報聞また復
をも然訓り何事

にまれ勅命によりて他に物せし
人の返りて其事を奏上するなり
○處斷 朝旨を以て決定せらるゝを
云處分はサタと訓て夫々に

仰つけ給へるを云處置の自ら
然爲むと思ひ定めたるをいふ
○稽首曰久 稽顙、叩頭など同じ罪を赦
ま給へと詔言するなり又

所るかたにもいへりもとは同言なれを聊差別あり
るに似たり能美之御幣とあるも二やうあり
○先驅 紀に驅仙躰
とも書り又

○青玉能水江玉乃行相爾天下乎治賜布
水は瑞なり江
は可愛なり行

相とは緒に貫たる玉と玉と相つら
なりてよく整ひたるが如くとなり
○優寵 朝廷の厚き
恵みなり ○褒給比賞

給比 朝廷の御賞
典をいふ ○被物 上より賜はる品をいふ元ハ御衣を賜はり
しなるを後には御衣ならぬをも皆カッゲ

モノとぬひ又かつ
け給ひなとも云り

助 辞

○於、是 爾、粵、爰、ちと然訓り上を
受て下を起す言なり ○故爾 仍爾も
同じ ○爾時 其時
なり ○

是以 漢訓あれど古くより言るなり

○此爾依氏

語の頭に仍、因などいふこと漢文に之常なれども古言にはさるる

とあし必ずこれによりてといふべきなり

○抑

るれもくの意にて上によりて言始むる言なれば最初に抑と言起すとはあるま

じきなり漢文に夫と事を起して云るも同じ

○事乃如久

物の譬をいふに云々の如くといふはで事の如くといふと古文の常

なり ○可爾可久爾

彼も此になり左右をも訓り

○及

其及某と云をオヨビと訓え漢よみなりマタとよむべし

○敢

堪てれ意と云り憚りつ、も心を定めて物するをいふ俗におみきりてと云に似たり

○既爾

全く盡くの意なり

万葉に吾名波須泥爾多都多山とあるははやくの意なり

○豫

兼てといふに同じあらかじめとも訓り又あらかじめか終てと重ても云り

○上件

某章某段某條などみかクダリと訓べし

○都氏

音をも訓り漢文にすべてと訓にことなり萬葉に戀云物者都

不止來とあるにて知べし

○具爾

萬葉、淺茅原出々爾また梶音ればらく、ふともあり委曲とも書りツマビラカと同言なり

○彌

愈も同じ漸に甚しくなり行を云言あり

○稍

漸々よと云意なりヤ、セ、ニとも云り

○所有

所

と同格の言よしと共に古言あり

○何方爾

俗にどのやうにと云に當れり

○誰

やしは助辭ありたれまとも

いへ ○自

已れ身つからの義なり記に自吾子也また天原自間あざあるは乃と云に近くもとよりと云むが如ま

○伊

○久

大、甚、痛などを訓り又いとともいといたうと重結ても云り

○伊

名の下にイてふことを添るはた、助辭に用るなり

○且々

事の未だ儘ならず次第に成立さまを云り且や見ゆるのはつゝに見わろむるを云り

○悉

世のことあり

のことぐ、あを多かりことくくと云は後の言なり

○斯久

宿シク來シクなどのシクと輕くて助辭也戀シク悔シク甚シク許支多

シクなどのシクは重くて繁くの義なるべし又我シク女シクなど云るは俗にらしくといふにあたり我シクは人の上の事も我身のことらしく

といふ義

○給布

尊ひて添る言なりタマハリは被給にて其物を受る人に就て云辭あり又自乃事に申し給はく思ひ給へらる

、など云るも尊
ひ言にゐるなま
○猶 尙も同じ本のまゝある義に云り又今比言に是非
ともどかくおをせいか意にも用たりいよくの

意に用るは古
意に合はず
○間 アヒダと訓もあしから
ねとホドと訓ぞ宜しき
○與 天壤の與風の共波
の共なといへりよ

タは向立の義に
て共にと申し
○由米 忌慎しめと云意の辞
にて禁止の意あり
○從 ヨとも云りヨ
リの義あり

○承前 爾 先、爰など
も書り
○等 タチともドモとも訓て古之は差別なけれ
ど今は尊ぶかたにタチといひ卑まむかた

にドモと
いへり

雜事

○宮風 ミヤブリにて歸備に對へたる
言なり閑蕩風姿など然訓り
○於多比爾 安穩平穩な
ど然訓り

貴 美く好き意也太前太常など
のフトにタの添りたるあり
○貴支高支廣支厚支 かく同じ類
の言をぬく

つも重ねいふは其事をねもごろにする古文のあやなりあく言を重ねる例
後世に之終の一つを支といひて上はみな久といへるを皆支と重ねるも

古格 爾 高も廣も隆盛なるを
○彌高爾彌廣爾 祝ていへる言なり
○彌遠永爾 無窮を
祝てい

へる 爾 儘になり正はタシ
○事能志太米登 下見えにて其
事の下地の顯

はれ見えたる
○事蹟 古跡、先蹤なども云り過
ぶし事の有し趣をいふ
○事乃本末 始終一十
なども同

ヒ有しことこの状を取
總ていへる言なり
○行迹 道のありさ
まを云り
○例乃隨爾 例式の通
になり仍例

をも然
訓り
○加遍 浪加遍 浪
い之度も打かへしてす
○申 須更 那更
毛須更 里那更

毛不言また言麻久毛更也などあるも同じいふ
までもるき義にて俗には勿論、無論などいへり
○一向爾 只向も同じ
其のみよ物

する義にて専
と同意なり
○千尋栲繩唯一條爾 一筋にと云を重ねくいは
むとてかけたる言あり
○飛

彈人乃打墨繩乃一筋爾 同上 ○取々爾 彼も此もと云る義に用也 ○取擬

比 其事を取持て ○仰侍 萬葉に高々又待とあるも仰く意なり ○覬餘 窺竈とも書り狡黠の邪

心を以て奪ひ掠めむと竊かに搔見 ○不便 行歩などの叶はぬにいへり ○不覺

坐とも訓りス、ロも同じ記に伊須々岐とあるも同じ伊は發語なりすしきろひといへると心の進みすゝろきて身をわすれて就かをいへり

○手着 便をも訓り俗に手が、りと云ふ同じ ○在乃悉 有限り不遺といふ意なり ○此與无久

此上なきと云意かり格 ○白地 假初おもとぬ義なり苟且も同じ ○安加良米

佐須事乃如久 儻忽をも然訓り思ひかけずにはかなる意なり ○於乃毛於乃毛 誰もく

んが ○此之狀 加久乃狀ともいへり

數量

○千五百萬 數の多きを云る言なり百八十百千萬なども云りホはモ、の約なり ○千五百秋 御代の長

きを祝て云り ○八百萬神 是も神の數多きを云り八十萬神也 ○壹年貳年爾

不在 年を常にはトシと云ふ其數を云ふは三トセ八トセなど云りトセは年經の意也 ○三千一百三十二座

延喜式内の神社の數なりチヤハ千箇なり三千には餘りと正しくと成へて下はマリと略きていふべし ○幾柱 古へは神をも人を

も貴みて幾ハシラとかやへたるなり二軀 ○一丈 もと杖をもて物の長さを度りしより

出たる ○三尺 尺は十釐の約りたる名なり尺の字音とするは非なり ○一寸 寸は刻の意なりとぞろは萬葉に

刻を伎と訓る ○七咫 アタハあひダの義にて指と指との間をいふべし ○八尋 八は彌なり尋は両手を

伸たる長さを云手を廣げて度
る故に一廣げ二廣げの意なり
○八重彌重にて幾重も
といふ義なり
○百箇餘八

十卷書の數
を云り
○五百濱千濱爾限無支真砂乃數乃其一毛濱の
真砂

の數比限りなく多きが中にと云
るなり百千加一毛なども云り
○伊久陀母不有幾程もなくてな
り俗に間もなく

と云に
○許々太久此言は古書にコキダ、コキバク、コ、ダ、ソキダク、ソ
コダクなど様々にありて數の多き事をいへり

○十握劔ツカは握みて指
四本の間を云り
○三段分をキタハ
云に同じ
○八十艘舟にい
へり

○五百代千代田に
云り
○壹振太刀に
いへり
○壹疋馬に云るハ一率二
率ハ義なり金錢に

云るは駒引錢
○何日カは來經の義なれば二日と
書てもフツカノヒと訓べし

祝詞作例

神は仕へ奉る爲方乃くさく多かる中に祝詞とり此上

あく重所爲とあらざはかり故に神官あるものは必ず

心茂つくしてよくくくらべおき時に臨みて猶豫さる

やうあらはほし抑祝詞は神は奏す詞あゑを集侍れる諸

人よも聞せて敬神の眞心を興起しめ其祭典の所由をも

知しむべきおれば必ず清き明き眞實の精神をつとめて

言葉の文をも美しく神にも人にもあかやと感歎らるべ

く白すべき事おれば唱へ誤り讀違へかどあれては神に

無禮なるのとならず人和らへにもありぬべければ單に

其祝詞乃文辭の美しきのみならずを稱ふる音聲もよく調むて高ららば低からば速からす遅からばよく心を治えて白すべきおとにころ○延喜式なるを朝廷より行を繕らるゝ公の祝詞にて官社あらぬには用がたき條もあるより府、縣、郷、村社より用べきを主として物したるおれば神宮并に官國幣社に係る祝詞を延喜式、明治祭式等によりて心得へきあり○何れの神社にも祭祀を行ふに大祀、中祀、小祀の差別あるへきなればをよく考へ互して前後乃辭をつらね供物の多少をも思ひ定む可く供物に無きものを言並へた輕薄の物を備へて横山の如

くかど稱るが如き漫言なきよふあらまほし○今は世に行をるゝ祝詞の作文も多かれとあまりにむつかしくまた事うげたるもありて心適かぬことのみ多かるめればある神官の乞も否み難くてかく物する事とはおれりける此は全ら初學の人乃爲に入立易からむを主とすれば中には在來りの作文に似よりたほもあるべく自然合るもあるべく又其題ごとにとわるべき事多く論すべき事もさはおれど處せければやとぬ○數多く題を掲げまた一題に二三通つゝ物せむとせしも紙數にかぎりあればさのみを掲げず但し常より多く行れて止事おき件には

似よりたる題を掲げておれかれ擧たるもあり葬式靈祭
或は祖靈祭改式等の祝詞も同く掲くべきおれどろと
別し葬祭要儀を物してうれに悉く載たればこゝには省
きぬ

一月一日祭 元日祭

明治廿何年登改禮留年乃始米乃朝日乃豐坂登爾掛卷毛畏支
何大神乃大前乎慎美敬比常爾毛仕奉留神官何某齋麻波里清
麻波里此乃御殿乎嚴乃磐境刀穰清米禮代乃幣帛刀進留由紀
乃大御酒乎事和之惠具之刀惠良々々爾宇豆乃大御饌乎高杯
乃彌高々爾汁爾毛米爾毛赤丹乃穗爾聞食皇美麻命乃大御

代波衝立留門松乃堅石爾常石爾變留事无久忌竹乃千代爾八
千代爾立榮由倍久齋奉里仕奉留神官敷座留氏子乃親族波捧
奉留餅乃鏡心足爾吉事乎重之米給比若水乃彌若延爾引端索
乃年乃緒長久令仕奉給倍刀畏美畏美毛稱辭竟奉良久登
白瀆

元始祭

是乃磐境乎靜宮刀鎮座瀆掛毛畏支何大神乃大前爾畏美畏美
毛白久高天原爾事始給比之遠皇祖乃命乃隨爾惟神所知食來
留皇美麻命乃天津日繼乃大御業毛皇神乃御心刀重美辱美
坐豆每年乃一月三日乎大政能始登此御祭仕奉良世給開留乎

以是乃御前爾毛大御酒大御饌種々物乎置足波之豆仕奉留
事乎平介久安介久聞食豆皇美麻命乃大朝廷乎始豆四方乃國
手安國刀守幸給比仕奉留百官人等波伊賀志夜具波延乃如久
立榮之米給比敷座留氏子產子乃男女與里天下乃公民爾至留
萬豆安寧平穩爾仕奉留神官何某加家內乃親族乎毛無害無事
彌遠永爾夜守日守爾護惠幸給陪刀畏美畏美毛白須
孝明天皇遙拜祭

後月輪東山御陵乃大前乎遙爾拜美畏美畏美毛白久倭文手纏
數在奴某等我言幕毛恐卦禮刀汝命乃大御名乎統仁天皇乃稱
奉豆今上天皇命乃大御考爾奈毛大座介留其大御代爾西蕃與

利軍艦於遣之豆國乃交際於開加牟刀須其下心毛計畢難介禮波
世人乃心毛不心當時乃大政預禮留幕府毛其所置爾惑比勅
旨於毛侍受豆漫爾其願言於許可佐延之刀聞延豆天下乃人民
愈平穩奈良受是以豆痛久宸襟乎惱之給比豆天地乃神爾乞祈
奉健支大稜威乎振波之給比三粟乃中世與里武家爾移禮留大
政乎古爾復佐比給波牟刀叡慮乎定豆謀言爲給比之毛大御業
成竟不給豆俄爾崩御坐之波最毛遺憾久最毛悔之支事乃限奈
留毛今上天皇命其大御心乎受繼給比豆明爾治留御代止成奴
留毛全良汝命乃大稜威刀奈毛尊美辱美都々此里乃公民等是
乃齋場爾神籬指立忌竹爾端出索引延案代爾由紀乃御食御

酒居並各々玉串乎擎持且慎美敬比仕奉留此狀乎御心毛多親
爾所知食豆是乃大御代乎齋奉外爾波黠虜乃覬覦事无久内爾
波臣民乃喧擾事无久守幸陪給開刀畏美畏美毛白須

祈年祭

掛卷毛畏支天照大御神豐受比賣乃大神大年御年大神此鄉
乎領座須何大神乃大前乎慎美敬比畏美畏美毛白久天在哉天
照大御神乃此稻種波顯見青人艸乃喫兵可活物刀宣言爲給
比又齋庭乃穗登言祝兵皇孫命爾授給比之隨爾神代毛今毛變
无久每年二月四日大朝廷爾御年初給開留加故爾此乃御前爾
毛今日乎生日刀祝定氏奠留大御酒波襲上高知大御食波平

免爾彌盛海物野物山物乎机毛登乎々爾仕奉良久乎平介久安
介久聞食兵百姓加手肱爾水沫搔垂向股爾泥搔寄兵取作良牟
奥津御年乎八束穗乃茂穗爾成幸給波婆荷前乎婆懸稅千稅黑
酒白酒刀汁爾毛穎爾毛秋祭爾獻上牟登里乃刀爾等登諸共爾
鶉成伊這回利恐美恐美毛稱辭竟奉良久刀白須

同

掛毛畏幾何大神乃御前爾御年皇神等乃御前乎慎美拜美畏
美畏美毛白久此鄉乎始米四方乃國乃百姓等加取作牟奥津御
年乎雨風乃障得无久蝗乃災害无久八束足穗爾成熟幸給開
刀由紀乃御酒御食雜々乃味物仕奉良久乎平介久安介久聞食

且朝夕爾給波留御食乎彌足爾令足給爾刀畏美畏美毛乞禱奉
良久刀白須

紀元節遙拜祭

大御內乃賢所爾畏伎也我天皇命乃稱辭竟給布祓火乃檀原
大宮爾天下知看志神倭磐余彥乃命乃大御靈乃御前乎慎美
敬比恐美恐美毛遙爾拜美仕奉良久波今日波志毛高天原爾事
始給比志皇親神漏岐神漏美乃命乃隨爾畝火乃檀原宮爾大
座坐且天津日繼所知食志日那留乎以且此里乃公民諸恐美尊
美且奠留大饌乎高杯乃彌高爾平瓮乃彌廣爾齊乃長久鰯魚乃
平介久皇御麻命乃大御代乎天地日月刀變事无久動事无久

齋奉國中乃人民波不平事無久悲牟事無久和比樂美令仕奉
給爾登畏美懼美毛言祝奉良久刀白須

神武天皇山陵遙拜祭

大和國高市郡畝火山乃東北乃御陵爾鎮座須掛卷母畏伎神
倭伊波禮彥命乃大前乎慎美敬比遙爾拜美奉利且畏美畏美毛
白久大朝廷爾波每年能例乃任爾大御陵爾御使奉出給且今日
能大御祭行波世給爾與利且此里能公民等此神社乃廣庭爾參
集里且忌竹差立神繩引延新菰乎伊豆能筵刀刈敷且入取乃
机爾由貴乃御酒御饌据並各々玉串乎捧且仕奉留狀乎平久
安久聞食且今毛以往毛皇御孫命乃大御代乎嚴御代乃手長乃

御代乃齋奉利外爾波百八十國乃人等復仇那布事无久射向布
事无久内爾波仕奉留百官人等天下四方國乃百姓爾至留
万氏不平事无久喧囂事无久守惠幸開給邊乃畏美畏美毛
白須

大祓奉告祭

此乃所乎嚴乃真屋登掃清米且神籬刺立招奉搗奉留天津神
國津神及瀬織津比賣神速開都比賣神氣吹戶主神速佐須
良比賣神等乃御前爾畏美畏美毛白久遠津神代爾伊邪諾大
御神詔給比之久吾波醜米支穢支國爾至氏在介里故大身乃祓
爲奈刀宜給比且筑紫乃日向乃橋乃小戸乃憶原爾至坐且禊祓

給比支又速須佐之男命爾千座置戸乃祓物乎負世手足乃爪乎
毛令拔氏神逐爾逐給比伎故此故事爾依氏仕奉來之例乃隨爾
大祓乃式仕奉留刀奠留由貴乃御酒御饌雜々乃物乎置高成氏
仕奉良久乎平久安久聞食氏集侍禮留神官里乃刀禰男女等加
過犯介牟罪穢乎今年六月(十二月)乃晦日大祓爾掃給開清
給開刀申事乎掃處乃皇神等相諾比給開刀畏美畏美毛
白須

天長節

此處乃底津磐根選宮柱太敷立且神隨鎮里座須掛卷母畏支
某大神乃大前爾何某畏美畏美毛白久年中爾月波多氣刀月乃

中爾日波多那禮刀今月乃今日波畏伎也現御神刀大八洲國治
有須吾皇美麻命乃生出坐志最毛愛多岐最毛多布刀喜日那流
乎以豆是乃大前爾奠留禮代能幣帛乎赤丹穗爾所聞食豆皇美
麻命乃大御壽波奧山乃上爾祭立留大磐乃堅石常石爾大御
代波端山乃本爾生立留五百枝賢木乃彌向榮爾天刀長久地刀
久志久食國天下乃大政平久安久所聞食邊久神隨守奉幸奉
給邊刀畏美畏美毛稱辭竟奉良久登白須

新嘗祭

掛卷毛恐支吾大神乃大前爾大年御年乃皇神等乎招請奉安
置奉豆神官某畏美畏美毛白久每年十一月廿三日波賢支也皇

美麻命乃大御親賢所乃御祭仕奉良世給閉留加故爾此乃御
前爾毛今月乃御日乎生日乃足日登撰比定豆皇神等能廣伎厚
支御靈爾成幸給比之奧津御年乃和稻荒稻爾御酒波瓊上高
知御賢波數々能平允爾貯豆汁爾毛穎爾毛稱辭竟奉良久乎赤
丹乃穗爾聞食天皇御孫命能大御壽波堅磐爾常磐爾齋奉生
座牟皇子等仕奉留大臣等百官人披茂之八桑枝能如久令立
榮給比天下乃公民波富足比賑比榮衣豆不足事无久不平事
无久緩牟事无久墜留事无久令仕奉給閉登男鹿成膝折伏手
掌膠亮爾拍上豆畏美畏美毛白須

例祭

何國何郡何里乃底津磐根爾大宮柱太敷立高天原爾千木高
 知豆鎮坐須掛卷母畏岐某大神乃大前爾神官何某恐美恐美毛
 白久大神乃高岐貴岐恩能賴乎蒙利豆喪無久事無久有經留事
 乎喜美辱美豆何時波有杵毛今日乎吉日乃吉時乃每年乃例乃
 隨爾奠留由紀乃御酒波饗上高知御饌波平瓮爾彌盛海津物
 野津物山津物御母比堅鹽爾至迄机毛登乎々爾置高成豆
 仕奉良久乎神心安良爾聞食豆今毛去前毛天津日繼乃高御
 座爾明津御神乃大八洲統御須皇美麻命乃大御代波茂御代
 乃手長乃御代乃堅石爾常石爾齋奉利仕奉留百官人波忠誠爾
 伊蘇志久勤結利四方乃國能蒼生等波安久穩爾敷坐留氏子産

子乃男女波各加乖々令有不賜外國乃異教爾惑事无久清岐
 明岐大和心乃真心爾成幸邊給比天取作良牟與津御年乎惡風
 荒水爾令相不給地震乃災无久香具土乃難无久子孫乃八十
 連續邇立榮仕奉志女給比天病志岐事无久煩志岐事无久守惠
 幸邊給邊乃畏美畏美毛白頭

祈晴祭

常毛仕奉留産土大神乃御殿邇掛卷山長伎天照大御神級津
 彦神天水分神國水水分神等乎招奉安置奉豆畏美畏美毛白久
 此頃霖雨降續氏陸田水田爾生留物波日麻爾久水爾浸利氏
 朽傷延牟刀須故爾爾百姓等憂邊歎加比是乃大前爾御酒御饌

海川野山乃味物乎置足波志天鵝成伊這廻利仕奉良久手御
 心毛明爾聞食天速爾天能村雲乎級戸乃風爾氣吹拂波志伊照
 耀久天津日乃御也乎伴志女賜比比百姓等我手肱爾水沫搔
 垂向股爾泥搔寄氏取作留與津御年衰始女草能片葉爾至留
 迄朽留事無久傷奉事無久彌繁爾繁彌榮爾榮天氏子産
 子等乃心足比爾成幸邊給邊刀畏美畏美毛乞祈奉良久刀
 白須

祈雨祭

此郷乎領坐掛卷毛畏支何大神乃御舍爾天水分神國水分神
 高意賀美爾意賀美乃神靈乎招奉令坐奉豆畏美畏美毛訴奉

良久波今年何月乃始與里旱魅打續豆植之田毛蒔之畠毛朝每
 爾萎美夕每爾枯損爾留乎農民等見悲波思惑波比乍天津水乎
 乞祈奉留狀乎御心毛明爾看行之豆奠留大御酒大御食種々
 乃物乎平介久安介久聞食天今毛令毛天津水乎降之豆良水乃
 廿水刀令受給比豆五穀乎始草乃片葉爾至麻豆潤昔久繁立
 榮豆年安留御代乃賑布御代刀成幸給比農夫等加心足比爾令
 足給爾登鵜成伊這回皇鵜自物頸根衝拔比恐美恐美毛乞祈
 奉良久刀白須

除蝗祭

此處乎宇須波伎坐何大神能大前爾大年御年神大地主神

乎招奉搗奉豆畏美長美毛白久百姓等我取作留與津御年波雨
風乃荒比无久旱魃能災无久繁榮延年乃爲乎此頃蝗涌豆害乎
爲須事少加良須此波大神等能御心爾協波奴事有良然良車毛
知開加良須故爾爾御酒御食種々物捧奉利氏御祭仕奉良
久乎平爾安爾聞食氏彼蝗乎追却卦穰盡志氏秋乃足穗乃八束
穗爾茂理登良志米給開刀乞祈奉良久乎相宇豆奈比給比氏速
爾神驗令有給開刀畏美長美母白須

避雷祭

掛卷母畏岐吾大神乃大前爾香具土神大雷神乎招請奉利氏
神官何某畏美畏美毛白久頃日雷神乃御心一速毘氏天雲乎保

呂爾踏阿多志大空乎登杼呂爾鳴動志天慶霹靂志給邊留事
乎村內乃人等怖懼美憂惑比氏心不安有乎憐美惠美給比氏人
波更那利家居田畑畜類爾毛災不令有守幸給邊刀禮代乃幣
帛乎捧豆恐美恐美毛白須

地震祭

此里乃產土刀坐須何大神乎始女天津神千五百万國津神千
五百万乃皇神等乃御前爾告奉良久波此頃誰神乃御心爾加
下動美奈韋震來豆家居傾伎土地裂氏人々乃心毛不安危美
歎加比乍禮代乃幣帛乎捧持氏仕奉良久乎平爾安爾聞食氏皇
神等乃牛掃坐須里乃限利波地震乃災乎令免給比守惠幸給

邊乃畏美畏美毛乞祈奉良久乃白須

疫神祭

是乃神籬爾招奉令坐奉留掛卷母畏伎建速須佐能男命乃大
 前附禮自乃幣帛登海川野山乃雜々物乎置足波志氏恐美恐
 美毛白久此頃尙病乃荒里蔓利氏村內乃人民等乎惱女苦志牟
 留事少加良受故爾爾家業乎毛不營日爾異爾心惑者比憂邊歎
 乍有乎憐美給比願美給比氏大神乃遠伎神代爾蘇民將來乃
 親族乎救給里助給比志事乃如久高伎貴岐恩賴乎垂給比氏疫
 病神乎始女疎毘荒布留物氣乎神祓爾祓退氣氏病臥世留人乎
 婆速爾癒志給比直志給比天夜守日守爾護幸陪給邊登良美畏

美毛乞祈奉良久登白須

命乞祭

掛卷母畏伎神皇產靈大御神伊邪諾伊邪册二柱乃大御泣澤
 女神刺國若姬命及此里乎宇須波伎坐須何大神能大前乎
 謹美拜美畏美畏美母白久何歲男女何某伊草恙病乃床用臥
 伏氏篤痴惱美苦牟事者過犯卦牟罪咎有氏大神等能御心爾
 背違問留事乃有登毛廣支厚支御心爾見直志聞直志給比氏醫
 藥能驗著久速爾病怠志米給比麗支元肆身爾復志賜問登親
 族同心爾禱白氏奠留禮代能幣帛乎御心毋明爾聞食豆玉能
 緒乃絕流事先久命真佐卦久救比助給波婆報賽能御祭

取擬比彌遠爾彌長爾大神等能御恩賴乎尊美辱美仕奉良牟
登須此之狀乎真具爾聞食豆返々毛守惠恤美給開登畏美畏美
母白須

除邪氣祭

掛卷毛文爾恐伎高皇產靈命關毛穴爾威岐天照大御神言幕
毛忌々志岐建速須佐之男命刀稱辭竟奉利豆畏美懼美毛白
久高天原爾神留坐皇我親神魯企神魯美乃命乎以豆國中爾
荒振神等乎神問志爾問志給比神掃爾掃給比豆畏伎也吾皇
御孫命爾平氣久安氣久所知食刀詔爲豆天降志依之奉利之此
乃大八洲國爾波異之伎妖魅惡伎鳥獸波住之女不給毛天離

夷乃荒野爾波如火瓮光久神如五月蠅邪神狗神狐狸乃蠱
物世留事麻々有豆奇術乎爲志公民乎惑波志惱之牟留禍神乎
天照大神乃背爾千入乃鞞刀五百入乃鞞手負腕爾稜威乃高
柄乎着弓腹振立劍乃柄急握堅庭乎踏豆沫雪乃如久蹴散之
嚴乃雄詰乎振波志嚴乃讓噴乎起志豆詰問給不事乃如久高皇
產靈命乃若逆意阿良波此矢爾中利豆遭害刀詔知兵衝返志給
比之天乃羽々矢乃天稚彥加高胸坂爾中利氏忽爾死利之事乃
如久建速須佐之男命乃十握乃劍乎以兵八俣乃大蛇乎寸々爾
斬屠給布事乃如久大御神等乃大御稜威乎以兵邪物乎立處
爾亡之女給邊刀乞祈白須事乎天津神國津神毛所聞食相諾

比給比氏朝乃御霧夕乃御霧乎朝風夕風乃吹拂事乃如久彼
 方乃繁木我本乎燒鎌乃敏鎌以氏打拂事乃如久速爾毒氣乎
 穰比退氣賜比氏今毛今毛公民乃一人多留何某加異伎病乎除
 伎給比氏儷之伎元乃姿爾返之給邊刀鹿自物膝折伏鶴自物頸
 根突拔氏畏美畏美毛乞祈奉良久刀白須
 辭別爾白久此乃與床爾御酒御饌海川野山乃物乎置足波之
 氏仕奉良久乎相嘗爾聞食氏此乃家內何某我身爾過犯氣牟種
 々乃罪穢有牟乎波大御神等乃廣伎厚伎御心爾見直之聞直
 之坐氏恤美給比助給比氏速爾病怠良之女給邊刀畏美畏美
 毛白須

塞神祭

掛卷母畏支八衢比古神八衢比賣神岐神登御名波白且稱
 辭竟奉良久者此里爾入立牟四方四隅乃大八衢爾伊邪諾命
 乃千引乃大石乎引塞給比志事乃如久御杖乎衝立給且志事乃
 如久立塞理坐且根國底國與理荒備疎備來牟諸乃邪物乎待
 防給比且上行者上乎守下行者下乎守且令入立里中乃人
 民者病志支事先久不平事先久諸々乃禍事乎令免給開刀奠
 留御膳物乎平良爾安了爾聞食受給里且夜守日守爾守幸開給
 開刀畏美畏美母白須

避方障祭

掛卷毛畏支建速須佐之男命天神地祇八百万神乃大前爾
 畏美畏美毛白久天地乃初發爾天神等乃修理固成給比且天照
 大御神能伊照給開留此能大御國爾神等能御裔乃生出來
 津留人草万能事乎取行比家居乎造理營美或本旅立或波事始
 女爲爾日乎忌嫌比方角乎忌避開伎由有開久毛有禰登如何奈
 留柱禰有且立塞利疎毘荒毘牟毛不可知故爾爾由紀能御酒
 御贊乎捧持比仕奉良久乎御心明爾聞食氏塞禮流禰等乎神問
 志爾問志給比神掃爾掃給比比崇流事无久障留事无久和女給
 比罰給比比家内安穩爾害无久事无久夜守日守爾守幸開給開
 登畏美畏美毛白須

龍神祭

此乃神棚爾齋奉爾掛卷毛畏伎火産靈神與津比古神與津比
 女神三前乃大前仁畏美畏美毛白久年始乃朝與利年終乃夕麻
 且一日毛不落皇神等仁捧留御饌手始女蒼生乃朝夕仁飯炊
 幾瓮作利種々乃煮物燒物爾至迄諸々乃食物味美久令調給
 邊留事乎尊比喜美八十日日波在杯毛今日衰生日乃足日登撰
 定米且由紀乃御饌御酒海川野山乃雜々乃物乎置足波志比
 仕奉良久乎平介久安介久開食處今毛往前毛高天原仁波登陀
 流新巢乃凝烟乃八束垂麻且燒舉地能下波底津石根仁燒凝
 志天嚴瓮黑麻志彌遠仁彌永爾令仕奉給比家人等我過犯須

罪内外乃穢在奉袁婆神直日大直日爾見直志聞直志坐天御
心一速毘不給伊須呂古毘阿禮毘坐須事无久今日毛賜波留
天津火乎天香山乃火登令受賜比伊豆乃御靈乎幸開給比且
家内平穩爾命長久千代爾八千代爾令仕奉給後登畏美畏美
毛白壽

井神祭

此處乎宇須波岐坐須掛卷毛畏支水波能賣神御井神忍雲
根神乃大前爾恐美恐美毛白久此乃生井乃水乎廣久厚久守
給比天朝爾夕爾間无久时无久悒舉留天津水袁天乃忍石乃
長井水登令受給邊留嚴乃御靈乎尊美辱美天奉留幣帛波御酒

御饌爾鮮奈留海物時乃菓乎取添天仕奉其久乎平介久安介久
聞食天千代万代毛爾基流事無久涸留時無久和伎水乃甘伎
水能清幾水乎彌多爾彌廣仁授給比與給比天此乃家能内外與
利起流罪穢乎祓給比清給比天親族波喪无久事无久息長久堅
石仁常石仁令仕奉給邊登畏美畏美毛白須

山神祭

掛卷母畏岐大山祇大神乃大前爾畏美畏美毛告奉其久波汝
命乃領坐濱此山乃大峽小峽爾生立留大木小木波彌生爾生
繁利彌榮爾立榮志女給比志事乎尊比謝比津々今日波志毛其
大木小木乎申乞且伐取運毘出佐在刀爲留事乎御心毛多親爾

知食 豆咎女賜布事无久 崇賜布事无久 守惠幸開給邊刀禮代
乃幣帛乎捧 豆長美畏美毛白漬

宮門祭

是乃御門爾稱辭竟奉留豐磐臚神寄磐臚神乃御前乎慎美敬
比禮代乃幣帛乎捧天恐美恐美毛白久新玉乃年乃始乃朝與利
年乃終乃夕麻豆是乃御門仁湯津磐村乃如久塞坐天四方四角
與利疎備荒備來在邪鬼寶物乎掠比取在登視比伺布盜賊等乃
自上往婆上手守自下往婆下手護待防幾穰却利豆朝夕仁此
乃大宮仁參入罷出留人者家仁毛身仁毛禱事无久堅石仁常石
仁守惠美幸邊給邊登乞祈奉久乎所聞食佐邊登白壽

地鎮祭

忌竹爾神繩引回志真柳指立此乃地内乎嚴乃磐境乃穰清女
豆掛卷毛長支埴安彦大神此里乎領坐須那大神乎慎美
拜美畏美畏美毛白久何某伊是乃處乎千代乃住處刀選定女豆
新爾家乎建在刀麓草茹退介土踏均之豆進流御酒御食海川
野山乃多明物乎凡物爾貯氏仕奉良久乎平爾安爾聞食氏堀
居留礎乃彌堅良爾衝立留柱乃動久事无久暴風洪水乃難
无久地震香具土乃禰无久堅石爾常石爾守幸開給開刀畏美
畏美毛白壽

新始祭

此所乎伊豆乃磐境乃掃清氷天神籬指立招奉撫奉留手置帆
 負命彦狹知命乃大前爾畏美畏美毛白久此回木工何某伊此
 鄉乃産土神乃神殿造仕奉畏奉登須此波不容易業奈禮婆大
 神等乃恩頼乎蒙利御保護乎乞祈奉畏奉刀奉留幣帛波御酒
 御饌海川野山乃多明物乎平介久安介久聞食天朝夕爾勤美
 仕奉留業乎守給比豆執斧乃過津事无久打墨繩乃違布事先久
 法式乃隨爾速卦久令事成竟給開刀恐美恐美毛白壽

柱立祭 立初祭

此乃神籬爾齋奉流掛卷毛恐支屋船大神手置帆負命彦狹知
 命乃大前爾畏美畏美毛白久先爾木工何某伊皇神乃高支貴支

恩頼乎蒙利豆朝爾夕爾勞支營美柱梁桁椽爾至迄造竟奴禮波
 今日乎生日乃足日登祝定女豆齋柱立牟刀爲天進留禮代乃
 幣帛乎平介久安介久聞食豆彌益々爾御靈幸比給比天突立
 留柱乃彌堅良爾打墨繩乃速爾事成竟志米給開刀畏美畏美毛
 白須

神社上棟祭

掛卷毛恐岐何大神乃大前又手置帆負命彦狹知命乃大前
 爾禮代乃御酒御饌海川野山乃御費乎案毛繁爾置高成豆恐
 美恐美毛白久先爾木工何某等此鄉乃大神能神殿造仕奉畏
 久乎大神等乃御靈賜利豆平介久安介久事成竟志女給開留事

乎嬉美辱美天今日乃生日乃足日爾上棟能御祭仕奉留乃大神
等乃御前爾稱辭竟奉良久乎相宇豆那比坐天天乃御柱國乃
御柱登築立多留柱乃動久事无久天乃御蔭日乃御蔭登覆間留
屋根乃噪氣亂留々事无久取舉多留棟梁桁椽乃錯動鳴事无久
千代万代爾靜介久平介久守幸間給間登鹿自物膝折伏天畏美
畏美毛白須

人家棟上祭

掛卷毛恐伎屋船豐受日女命手置帆負命彥狹知命乃大前
爾畏美畏美毛白久大工何某伊大神等乃厚支恩賴乎蒙利且朝
夕爾勞支營美打墨繩乃違布事无久釘乃過事无久造建竟奴禮

波今日乃吉日能吉時爾上棟能祭仕奉留登御酒御饌弓矢幣
帛棒奉良久乎平加爾安加爾聞食氏築立留柱取舉留棟桁梁
能錯比動岐鳴事无久打堅米多留釘楔能緩比无久千代常登波
爾守給比幸給陪登畏美畏美毛白須

假殿迂宮祭

掛卷毛畏伎何大神乃大前爾御酒御食種々乃物乎備邊奉氏
某畏美畏美毛白久大神乃鎮坐神殿毛年月乃來經行隨爾雨
爾朽風爾壞禮氏最古久最危久破禮損波延牟登爲乎此般產子
乃人民等思議利氏新宮乎造改女牟登今日乎生日乃足日登
選定女氏畏氣禮登大神乃御靈實乎假宮爾迂志仕奉良牟登須

此狀乎見志明女給比氏御心毛安久神幸坐登畏美畏毛
白須

本殿遷宮祭

掛卷毛畏伎何大神乃大前爾何某由麻波利清麻波利畏美畏毛
毛白久大神乃鎮坐牟瑞乃御舍乎下津岩根爾宮柱太敷立高
天原爾千木高知氏天乃御陰日乃御陰刀造竟且明治何年何
月乎生日乃足日刀撰定氏是乃假宮與利新宮爾遷奉夏牟登奠
留御酒御饌海津物野津物山津物乎平爾安爾聞食氏仕奉
留神官教職里乃刀禰爾至留麻氏過犯氣牟種々乃罪穢乎神直
日大直日爾見直聞直坐氏大神乃御心毛安穩爾惟神還幸行

勢刀恐美恐美毛白壽

正遷宮本殿祭

掛卷毛畏伎何大神乃大前爾何某畏美畏毛白久先爾氏子産
子能人民等思議利且是能宮地乎朝日能日向布處夕日能日
隱處登下津岩根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知且天乃
御陰日乃御陰刀作仕奉利氏八十日日波有登毛明治何年何
月何日乎吉日乃吉時刀撰定氏神籬木指立嚴乃磐境登祓清
女氏仕奉是乃新神殿乎一都宮刀靜坐且奠留幣帛波明妙照
妙和妙荒妙御酒波鏡上高知御饌波平瓮爾彌盛鏡乃餅居
並大野原爾生物波甘菜辛菜青海原爾住物者鱒乃廣物鱒乃

扶物澳津藻草邊津藻草爾時乃菓乎取添氏拆竹乃登乎々爾
置足波志氏仕奉良久乎平爾安爾聞食給比今毛去前毛明御神
乃天下統御須皇美麻命乃大御代者茂御代乃手長乃御代登
齋奉利雨風時爾屬比地震香具土乃災光久國中靜爾敷坐留
氏子產子乃人民者家爾毛身爾毛禍事无久五十榎彌桑枝乃
如久立榮志米氏子孫乃八十連續絶留事无久墜留事无久彌
遠爾彌長爾令仕奉給比夜乃守日乃守爾守惠美幸邊給開
乃手津物亮々爾拍上豆畏美畏美毛稱辭竟奉无久刀白須

新宅祭

掛卷毛長支屋船豐受比賣大神手置帆負命彦狹知命此地

乎領座產土大神乎是乃奧床爾招奉令坐奉利豆畏美畏美毛
白久大神等乃天津御量乎以豆事始給比之隨爾大峽小峽爾
生立留大木小木乎伐取持來豆是乃新室乎築營美造竟豆今
日乃生日能足日爾奠留幣帛波明妙照妙和妙荒妙御酒波饗
上高知御饌波平瓮爾彌盛海川野山乃味物乎案代爾置足波
之天仕奉良久乎平介久安介久聞食豆突立留柱乃傾支朽留事
无久取葺留萱乃曝支无久桁梁戸窓乃錯動鳴事无久夜女乃
伊須々岐伊都々之支事无久大風洪水能禍事无久地震香具
土乃災害无久子孫乃八十續彌向榮爾立榮由陪次夜守日守
爾護惠幸給開刀畏美畏美毛事祝奉良久刀白須

養蠶神祭

掛卷毛長支保食大神乃大前爾畏美長美毛白久風音乃遠津
 神代爾汝大神乃奇靈爾妙奈留神德爾依豆成出多留蠶者志毛
 顯見蒼生乃其繭乎口爾合兵絲乎績邊伎物習刀教給比志隨爾
 明妙照妙乎始女綾錦綺繪絕乎織兵宇津秦衣爾作里氏神代
 與利万代乃今利至迄其恩賴乎蒙里來留者最毛尊久辱久故
 此春毛齋清麻波利氏養留蠶爾昆虫乃災无久氣候乃違无久霖
 雨疾風乃障無久伊加志八桑枝乃如久殖利榮志女氏過穢須
 事无久直々爾成竟志米給邊登乞祈奉利氏奠留宇豆乃御酒
 御食種々乃物乎御心穩爾聞志食氏可美繭能麗波志伎

給乎彌多爾令績得給比守里惠美幸邊給邊登畏美長美毛
 白須

酒神祭

此乃小床乎嚴能眞屋登齋定天請奉令坐奉留掛卷毛畏幾大
 穴牟遲命少彦那命乎始女奉利御酒爾功在留皇神等乃大前
 爾告奉長久者上津代爾皇神等乃御酒乎釀美成須神事乎始女
 給比教給比志隨爾其業乎受繼幾持傳天年每爾造禮留御酒乎
 美酒乃甘酒登釀美成志女給邊留事乎喜美辱奈美天奠留今日
 能幣帛乎安幣帛乃足幣帛登聞食天今毛往前毛酒造兒等我
 朝爾夕爾勵美勤美釀成須御酒乎事那具斯惠具志登成幸

陪坐氏彌遠爾彌長爾造命仕奉給開登畏美畏美毛稱辭竟奉
良久登白須

祈旅祭

此所乎宇須波伎坐須何大神及阿須波神波比伎神入衢彦
神入衢姬神乃大前爾長美畏美毛白久某伊鳥賀鳴東乃國爾旅
立世牟刀為天今日乃生日乃足日爾奠留御酒御饌種々乃多明
津物乎平介久安介久聞食天道乃八十隈川乃八十瀬乎伊行
渡良比山行婆凝々志岐峯乎毛乘駒乃躡久事无久海行婆濶久
波毛行船乃傾久事无久玉銓乃道乃長手乎恙牟事无久障留事
无久平爾安爾命在通給邊刀畏美畏美毛白須

漁獵祭

此里乃產土登持齋久掛卷毛畏幾何大神別爾波海幸乎守給
布天細女命事代主神登御名波白天稱辭竟奉久波此乃海邊
爾漁須留海人等我日頃海幸乎失比天憂邊歎加比飢寒牟登為
留狀乎御心明爾聞食憐美慈美給比天今毛今毛皇神等乃厚
幾御靈乎幸開給比天鱒乃廣物鱒乃狹物乎追集天海人等我
引網乃網目漏左浪左波々々爾引揚志女給邊登禮代乃幣帛乎
棒持天恐美恐美毛乞祈奉良久登白須

出舟祭

掛卷母畏伎住吉大神海童大神乃御前乎慎美拜美畏美畏美

毛白久今日乃生日乃足日爾何村何某伊舟出爲且何國何地爾
 趁加牟登爲留乎御心毛明爾所知食且海原乃潮乃八百會毛波
 風不立平加爾安加爾誘比導岐坐且速氣久此乃淡爾歸里着志
 女給邊刀禮代乃幣帛乎捧氣奉里天畏美畏美毛乞祈奉良久刀
 白壽

初宮參

掛卷毛畏岐吾大神乃大前爾恐美恐美毛白久氏子何某乃眞
 名子何某大神能御靈賜利天平介久安介久誕生天既毛百余
 十日爾成奴故今日乎生日乃足日刀祝定天大前爾參出禮
 代乃幣帛捧持且拜美仕奉良久乎眞具爾聞食天今日乎初刀

諸々乃禍事无久病志岐事无久煩志岐事无久彌健爾彌向榮爾
 令生立給邊刀畏美畏美毛白壽

祈平産

掛卷母恐岐吾大神乃大前爾何某畏美畏美毛白久何某妻孕美
 且胎月爾當利奴故爾仁今日乎生日乃足日止齋定且奠留禮
 代乃幣帛乎安幣帛乃足幣帛登聞食天高岐貴岐恩賴乎以天
 惱本事无久苦本事无久安久平氣久令産竟給比天母子諸共无
 害无事障事无久彌健爾彌向榮爾守惠幸邊給邊刀畏美畏美
 毛白須

祈家内安全

八十日日波有禮存今日乃生日乃足日爾掛卷毛恐岐吾大神
乃大前乎慎美敬比禮代乃御酒御饌種々能物乎捧備天恐美
恐美毛白久大神乃氏子何某預天大神乃神德乎崇女尊比仕奉
良久乎見志給比聞志給比豆大神乃高岐貴岐御恩賴乎以天恤
美給比慈美給比天家內乃親族波各加乖々不令有外國乃異
教爾惑事无久清伎赤伎大和心乃真心爾誘毘導伎給比天過
犯氣牟罪咎有牟乎婆見直志聞直志坐豆諸々乃禍不令有子
孫乃八十連屬家門高久令立榮給邊刀恐美恐美母乞祈奉
良久刀白須

架橋祭

此所乎宇須波岐坐須掛卷毛畏伎何大神及木工神手置帆
負命彦狹知命水神水波能賣神乎招奉里擣奉里豆畏美畏
美毛白久今奧山乃大峽小峽爾生立留木手本打切末打斷中
間乎持出來豆木工等我伊蘇之牟端爾幾陀毛有奴爾架渡志造
成留此乃橋乎磐橋乃朽世奴橋登守給比川底乃岩根爾堀固
多留柱乃長久久久取並多留板目乃錯動鳴事无久打固多留釘
久佐備乃緩毘无久往來人牛馬小車爾至迄平介久安介久渡
志給比通志給比波牟事能志多米刀今日乃生日乃足日爾種々乃
幣帛捧奉利何里乃何某夫妻乎世乃長人刀撰定岳渡利初乃
御祭仕奉良久乎御心毛明加爾聞食岳彌遠爾彌永爾爾留々

事无久墜留事无久守幸開給開登畏美畏美母稱言竟奉良久登
白須

開道式祭

此乃新墾乃道乃上爾齋竹差立端出索引延神籬立且令坐奉
利稱辭竟奉留八衢彦八衢姬神此乃何乃里乃產土神此乃何
山乃山祇神等乃御前爾齋主某畏美畏美毛白久此乃何乃鄉
從利何能鄉爾至留山路波嶮久狹久且旅人毛往來爾惱美種
々乃物持運布便惡加利志乎此能何乃里人等既久毛嘆伎愴
美如何此道乎修繕直左比往來乃人乃手着宜加良奉事乎登
思議氏公爾毛願申志地方稅乃助左邊得多禮婆里人等喜備勇

美同心戮力去月何日與利工丁乎率天石切通志土引均志身
毛棚不知勵美勞伎嶮伎處波平介久狹伎處波廣久未幾陀毛有
奴爾功成竟且廿之道乃平卦伎道登波成奴故今日乃生日乃足
日爾此乃何縣乃知事何郡長里能乃爾乎始女此事爾勞伎之
諸人男女爾至麻天此乃齋庭爾參集氏開道乃御祭取擬比進
奉留幣帛波明妙照妙五色乃物御饌波平瓮爾彌盛御酒波瓊
上高知瓊腹滿並且汁爾毛穎爾毛海川野山能味物乎如橫山
置足之天仕奉留幣帛乎安幣帛乃足幣帛登聞食天今毛去前
毛大雨零流留水乃山上從利多岐知落留毛此道乃壞禮破
留々事无久谷川能水層益里天漲禮漂蕩毛此道乃崩禮損布事

无久又往來人方身爾咎過有非乎嬰見直聞直座且禍神乃禍
事不令有財乎掠女奪牟盜賊等乃往來乃人乎脅加須事不令
有夜乃守日能守爾守給比幸開給邊登恐美恐美毛稱辭竟奉
其久登白頂

講演奏上祭

掛卷毛畏支何大神能大前爾畏美畏美毛白久此能御殿內爾教
能場乎設整教職何某乎聘兵神隨直支正志支神代能御手振
大神達能御功德乎始米大朝廷能御提人身能行比死牟後能
魂能行方乎毛真具爾說明之教諭志米牟刀何時波有登毛今日
乎吉日能吉時刀奠留種々能幣帛乎御心非明爾聞食且諸人

波外國乃異教爾惑布事无久清支明支大和心乃真心爾成幸
邊給比且彌遠永爾立榮令仕奉給比時到利退牟後者高天乃
神乃府爾誘比導支坐且放失給布事无久顯世爾毛幽世爾毛夜
守日守爾護惠幸給開刀恐美恐美毛白頂

學神祭

此乃神床爾神籬立且招奉利鎮奉留掛卷也畏岐八意思兼神
忌部神菅原神羽倉大人岡部大人本居大人平田大人久延
彦神乃御前乎毛慎美敬比畏美畏美母白久某伊乎遲无久拙岐
身爾波在村風音乃遠岐神代乃神典乎讀窺比日本乃瑞穗國
乃萬乃國爾勝利天尊久皇美麻命者宇宙乎母統御陪支元因

君臣乃大義乎母具爾令知給問乃朝夕爾勞政勵平心乎恤
慈志美給比氏世爾所有書乃云書者千卷五百卷有乃盡說明
志令悟得給比天幽事神事母知得陪岐限者令知給比天足波
不行乃母天下乃大小能事母令知給比此大道能彌明加爾彌
高爾吾日本乃國乃光乎毛令耀給邊乃禮代乃幣帛捧持以恐
美恐美毛乞祈奉良久乃白須

武神祭

此所爾神籙立互招奉搗奉留健御雷大神經津主大神乃大
前爾官位姓名畏美畏美毛白久海軍少將何某等兼互大神乃
御稜威乎尊里奉利欽慕奉留契故爾今日乃生日乃足日爾禮

代乃幣帛乎捧互仕奉良久乎平加爾安加爾聞志食以物部乃道
乎彌益爾守給比幸開給比大朝廷爾伊蘇志久令仕奉以大義
乎明加爾志倭心乎令起給比事有滋大神等乃遠岐神代爾是乃
豐葦原乃中國爾所有螢成耀神佐蠅成惡神乎掃平給比氏
大八洲乎治女賜非志任爾大君乃御爲國乃御爲爾海行渡水
演屍山行婆草生屍乃淨岐明岐真心可助給非導伎給非天大
君乃醜乃御楯登仕奉良志女氏八十氏人乃名爾毛不耻彌守
爾守幸開坐以武支其名乎顯左之米給非許々多久高岐功乎令
立給邊乃畏美畏美毛乞祈奉良久登白須

大國主神祭 甲子祭

掛卷毛畏支大國主太神乃大前乎慎美敬非畏美畏毛白久
汝命波父大神乃詔乃隨爾世乃荒振神等可言平和志且大國
主乃成給比少彥名命乃同心戮力坐且國土乎經營美顯見
蒼生乃爲畜產乃爲爾病乎治留方乎定女給比又藥乃方禁厭
乃術乎毛始女給比且大造奈留功績乎樹給比又皇孫命乃天
降利坐志時爾波天神天祖乃神勅乎畏美坐且現事乎避奉利給
比天津神乃慇懃奈留神勅爾依且幽事乎所知食在乃百不足八
十堀手爾隱給比出雲乃八百米杵築宮乎天日隅宮乃定米天
鎮給比幽冥乃事執坐且者大地乃官乃成且海乃內外乃人魂
乎毛總統御給比天神代毛今毛變事无久夜乃守日乃守爾守

奉給邊留神功乎仰岐尊美奉且萬世乃今爾至麻且子日乎御祭
日乃定女且伊豆乃眞屋爾注連引延木綿取垂且奠留幣帛乎
安幣帛乃足幣帛乃聞食且家內穩爾子孫乃親族波各加乖々
令有不給病志伎事无久煩波志伎事无久壽長久富榮令仕奉
給邊登稱辭竟奉且久乎平介久安介久聞食左延登畏美畏美
毛白須

惠美須神祭

掛卷母畏支都味齒八重事代主命乃大前爾畏美畏美毛白久
皇睦神漏岐神漏美乃命乎以且皇御孫命波豐葦原乃水穗能
國乎安國登平氣久所知食登事依志氏天降志賜布時爾大神波

出雲國三穗之崎爾鳥遊魚取乎樂美坐志乎立處爾葦原乃中
國乎皇御孫命爾奉利坐氏父大神登共爾事避坐志波最毛長
久君親爾忠誠奈留道乎顯志坐之廣伎厚伎神德乎仰伎尊乃美
貴毛賤毛家々乃神棚爾齋奉禮留乎十月廿日波之毛惠美須
祭登稱奉利氏市人等乃御祭仕奉良久乎平爾安爾聞食氏商
乃業乎守給非清伎明伎真心爾家乎毛身乎毛令治賜非氏膠乃
木能彌嗣々爾絕留事无久墜留事无久富榮仕奉良之女給邊
登今日乃朝日乃豐榮登里爾稱辭竟奉良久登恐美恐美毛
白須

猿田彦神祭 庚申祭

掛卷毛畏岐猿田彦大神乃大前乎慎美拜美恐美恐美毛白久
高天原爾神留坐皇睦神漏伎神漏美乃命以氏皇御孫命爾
豐葦原乃水穗國安國登平氣久所知食登言依之奉利氏天
乃磐座袁離知天能八重雲袁伊豆能千別爾千別氏天降之奉
利之時天能八衢爾迎奉利氏日向能高千穗能串觸峯爾啓行
奉利給非大神波神風乃伊勢乃狹長山五十鈴能川上爾鎮利
坐豆天照大御神乎待受給比諸々乃荒振邪神乎拂却豆上波
皇美麻命乎齋奉下者青人艸乎守惠美豆導伎誘比給邊留神
功乎万世乃今爾至迄仰伎尊美奉留加故爾今日乃生日乃足
日乃夕日乃降與利五百枝賢木爾木綿取垂神繩引延豆是乃

小床乎伊豆乃眞屋乃齋麻波利清米由紀乃御酒御饌種々
乃物乎貯天能饗和爾齋許母利終夜仕奉良久乎平爾安爾
聞志食氏諸々乃禍事乎被比給比長惟神直伎正志伎大道爾
誘比導伎坐長太伎雄々志伎功立志女給開刀畏美畏美毛稱
辭竟奉良久刀白須

天滿宮祭

掛卷毛畏支天滿宮刀稱奉留菅原大神乃大前爾長美畏美毛
白久汝命波天稟聰明叡智世爾勝坐天帝道乎輔佐奉利億
兆乎撫育坐豆忠誠波月日刀並仁恩波天地刀齊久坐又文道
乃大祖詩歌乃本主刀坐豆高德波葦原乃中國與利海隔留異

國乃豆鳥跡久之九止里正木乃葛永久傳波里貴毛賤毛厚支御
恩賴乎蒙里深文御惠乎仰加奴者无久今爾爾今日乎吉日刀撰
定女豆禮代乃幣帛乎捧奉仕奉良久乎平介久安介久聞志食豆
天津日嗣者天刀長久地止久志久國內平穩爾萬民富榮豆文
教彌廣爾學術彌遠爾清支明支大和心乃忠誠爾成幸邊給比
兵異心異行无久千代爾八千代爾令仕奉給開刀長美畏美毛
稱辭竟奉良久登白須

鎮魂祭

畏岐也賢所爾鎮座八柱大神及櫛玉饒速日命天鈿女命乎
招奉令坐奉氏恐美恐美毛白久高天原爾神留坐須神漏岐神

漏美乃命以氏饒速日命爾十種乃神寶乎授氏事教給久汝此
 天璽乃瑞能神寶乎以氏豐葦原乃中津國爾天降氏顯見蒼生
 乃爲爾鎮祭氏若痛所有波此十種乃神寶袁以氏一三三四五
 六七八九十登布瑠部由良々々登布瑠部如此爲氏波死人
 毛更爾返生牟登事諷給比之隨爾饒速日命波天磐船爾駕天河
 內乃國河上哮峯爾天降着氏大和國鳥見山麓能白庭爾遷
 奉齋奉給比石上大神登御號袁稱奉利天大朝廷爾毛每年乃
 十一月爾永世乃例登鎮魂能御祭仕奉良世給比事乎思比
 尊美今日乃生日乃足日爾由貴乃大御酒大御饌雜々乃物乎
 置足者之天供奉良久乎相嘗爾聞食天仕奉留布瑠部乃神事乎

贊給比幸開給比且何某等加家內乃親族波諸々乃病乎速爾癒
 之給比諸々乃枉事乎忽爾掃給比直支正支固有乃御靈乎婆寬
 爾靜爾身體乃中府爾鎮志女給比天浮禮漂泊事无久外國乃異
 教爾惑事无久心柱彌堅良爾夜守日守爾護惠幸邊給開刀畏美
 畏美毛白須

祖靈祭

何氏乃遠都御祖代々乃御靈殊爾渡我考乃坐須何翁命我妣
 乃坐須何乃自命能御前爾謹以白久家繼何某等御祖等乃深
 支厚支恩澤乎蒙利且無喪無事有經留事乎嬉美悅比春季御
 祭仕奉留刀今日乃生日爾親族參集里天金色乃甘酒銀色乃

餅海物野物山物爾時乃花乎毛折添豆擊奉良久乎御心明爾
聞食豆異心異行无久清支明支真心爾令面向給比負持留氏
名不穢家門高久宇麻波利榮久壽命長久朝夕手向春秋乃御
祭乎毛善之久彌遠長爾令仕奉給開刀畏美畏美毛白須

修祓詞

此乃齋場爾作備留御饌物參集禮留神官教職里乃刀禰男女
爾至迄過犯卦武雜々乃罪穢有牟乎波大祓式乎以豆掃清牟
留事乎天津神國津神祓戸四柱能神諸々相宇豆奈比給開刀
畏美畏美毛白須

拜風神詞

風神級長津彦神級長戸邊神乃御前乎慎美散非日爾異爾天
津神國津神爾乞祈奉留事乎風乃共彌高聞上給非氏自長
久仕奉志女給開刀畏美畏美毛白須

拜竈神詞

竈所爾齋奉留火産靈神澳津比古神澳津比女神登御名波
白氏今日毛賜波留天津火乎天香具山乃火登受志女給非氏諸
々乃禍事无久嚴乃御靈乎幸開給開刀畏美畏美毛白須

拜井神詞

井處爾齋奉留水波能賣神御井神鳴雷神登御名波白氏今日
毛賜者留天津水乎天忍石乃長井水登受志女給非氏諸々乃禍

事无久嚴乃御靈乎幸閉給閉登畏美畏美毛白須

降神詞

掛卷毛畏支何大神是乃朝座爾降座世何大神是乃朝座爾降座世是乃朝坐爾降坐世

昇神詞

是乃朝座爾降坐留何大神元津御座爾返里鎮剎座世

◎乃樂舍大人著述書目

○古語拾遺略解

一卷 開板

賣價金廿八錢 遞送料金貳錢

此書は先生積年研業の餘徳を以て註解せられたる簡便の書にして初學の者も知易く又千古未發の説もあまて我國家の成立上古の神蹟を知むと欲するには此書を以て先とすべし

○大祓述義

一卷 開板

賣價金廿三錢 遞送料金貳錢

本居平田二翁の説に群臣百官に宣聞すべき宣命れ如く解かされたるをり神に向て唱ふべきものに非すと誤認するもの、多かるを遺憾に思はれたるより此著述あり抑延喜式の八卷之悉く祝詞なるべければ大祓も告神の祝詞なる由を委しく辨解せられ又大祓即ち天津祝詞たる事をも證明せられたる書なり此頃丸山作樂氏より贈られたる書翰にも先般之古語拾遺略解今度の大祓述義等何れも結構に御著述殊に大祓は是香翁の天津管曾を第一と相心得候に老兄又一層之御卓説敬服仕候云々の文あり實に大祓を口にする人此書を見れば論語不知の謗を免かれざるなり

○土佐日記略解

一卷 開板

賣價金拾八錢 遞送料金貳錢

此書の註釋多しと雖も或は蜜に過ぎ疎に失して其要領を知得難きより或人の乞によりて註解せられたる書あれば誰も見易く知り安く和歌和文に志あらむ人は先づ此の書によるべきなり

○祝詞手引草

上下合本 一卷 問板

〔賣價金卅四錢 遞送料金四錢〕

此書は祝詞に必要な詞を撰て註解し又作例をも數多く舉られたれば神に仕ゆる人は座右を放つ可らざるの書なり

○葬祭要儀

一卷 次板

此書は先日本人民たるもの、外國の葬祭に據ると非なる所以を論じ當今朝野に行はる、本邦の葬祭を経験して其心得を懇切に辨明し祝詞は遷靈出棺墓前歸家祭と始め靈祭改祭招魂祭等に至るまで悉く作例を舉られたれば貴賤の葬式靈祭を行ふに必要な書なり

門人 工藤虎太郎記

定價四拾錢

明治廿五年六月廿二日印刷
同年六月二十三日出版御届

著作者兼
發行者

佐賀縣士族

岡 吉胤

三重縣安濃郡新町大字
古河百六十壹番地寄留

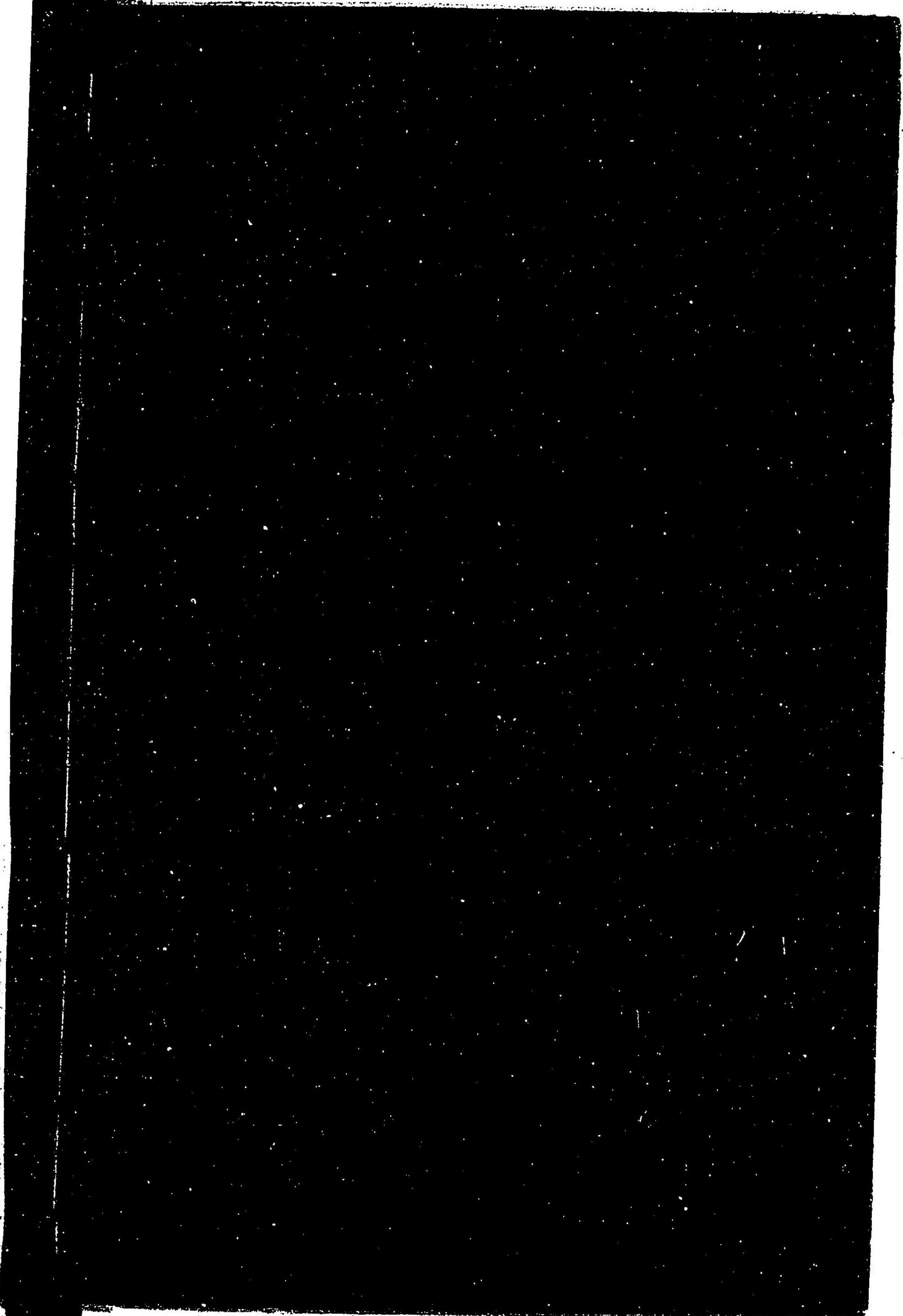
三重縣平民

印刷者

田中房吉

三重縣津市大字
樂町拾六番屋敷

[Redacted header text]



[Redacted footer text]